

芥川だより

発行日 ***2017年7月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
 最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

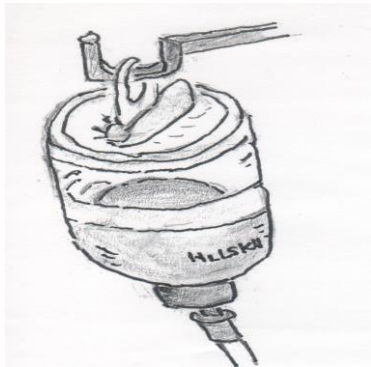
高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072 - 681 - 8870

梵

***** 一部100円です *****

母の口癖「早く楽になりたい」



気丈な母であるが、さすがに96才にもなると弱音を吐く「おまえも祈ってくれ、はよう死ねるように。わたしは毎日ご先祖さんや仏さんに祈っておる。頼むでよ」と会うたびに言うようになった。確かに生きていくのが辛そうである。骨ももろくなったようで手押し車でよたよたとふらつきながら歩く姿もおぼつかない。

しかし、身体自体には悪いところもなくまだまだ死ねそうにない。百までは大丈夫だというのが大方の見方だ。まだ4年もある。いやそれ以上かもしれない。

日本は安楽死が認められていない。1秒でも長く生きらすというのが社会的なコンセンサスである。どんな状況であつても死なせてはいけない。

祖父も老いて農作業が出来なくなると死にたいと毎日のように言い続けていた。中学生だった私も老いゆく祖父を見ながら「早く楽になっちゃったらいいのに」と思っていたが、入院することもなく長生きし82才まで生きた。もうそろそろ安楽死の論議をしてもいいのではないか。本人が死にたいと願っているのに無理やり生かしておくのも酷なものだ。

どうして人は自分の死ざまを自分で決められなくなったのだろうか。自分で死にたいと思えば死ねばいいのであって、他人の指図に従わなくてもよいのだが、他人の目や残された者へのためらいなどで自死を罪悪のようにしてしまい死の決定権を失い最終的には医師や家族に任せてしまうようになった。

倫理的、宗教的に自殺は罪悪とみなされている。スイスやオランダなど一部の国では安楽死が認められているが、安楽死はいわば自殺のようなものだから、人々に染み付いた自殺への罪悪感を消し去ることは至難である。しかし、私は全身麻酔を経験した為か苦痛を感じない安楽死に憧れる。死ぬことは人生最大の幸せだという人がある。死ぬことの自由を持たずして生きる自由はないと思う。しかし、覚悟がいる問題ではある。

死をめぐるあれやこれ(34)

石川 吾郎

夜啼く鳥は(2) ヨダカ

私にとつて夜啼く鳥の定番は、子供の頃、夏になり実家の二階の窓を大きく開け放していると、山の方から聞こえてくるヨダカの声だった。キョッキョッキョッと、深い闇と時間を切り刻むように、際限なく啼き続けているのが聞こえていた。ときどき部屋の灯火に飛び込んでくる騒々しいカナブンの羽音とともに、私の記憶の中で結びついている。

天文少年だった私は、この実家の二階の窓から、小型の反射望遠鏡で土星の輪や木星の衛星などを眺めていた。夏の愉しみは私のお気に入り、こと座のリング星雲を眺めることだった。それに白鳥座の嘴の部分の二等星アルビレオ。これは青と黄色の二重星で、宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』に美しく描かれている。

「あれが名高いアルビレオの観測所です・・・その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉サファイアと黄玉トパースの大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるとまわっていました・・・」

そしてこの記述の虜になって賢治の作品の多くも読むことになった。その中にはむろん『よだかの星』も含まれていた。

ヨダカは自分が生きることが、すなわち殺生を続けることであることの矛盾に、自らを抹消したが、私が同じ問題を引き受けるようになるには、まだ時間が必要であつた・・・

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんなで知ろう日本の危機	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	5
哲学屋のつぶやき	祖蔵哲	7
大塚典道	10	8
大人の今昔物語	35	9
B級サラリーマン渡世譚	48	12
オクラの山たより	10	13
我がおくのほそ道の旅	7	18
米国紀行	7	19
「花」の美しさという様なものはない	大江雄鬼	20
孫ウオッチング	19	21
編集後記	嘉	21
女90年の軌跡	眞純	22
俳句	土田裕	22
	影山武司	22

みんなで知ろう日本の危機(22)
われわれ国民は愚弄されている。あ
るいは正しく怒ること

■はじめに

伊藤 明

この一ヶ月の政治的な動きは、激しいものでした。「共謀罪」法が、参議院の委員会の採決を飛ばして、中間報告と称して本会議で採決をするという民主主義の手続きを無視した、不当で異常な手続きによって成立してしまいました。また加

計学園問題の疑惑は、文科省から次々に新しい証拠資料が出てきて、それでも(それゆえに)追及途上で中断。安倍政権の御用ジャーナリスト・山口敬之氏の「準強姦事件」の逮捕状もみ消しの件は、依然追及されないままに、もみ消しが計られようとしています。

そして七月二日、東京都議会選挙における「自民党の歴史的大敗」。その期間に飛び出した稲田防衛大臣の「自衛隊の政治利用」発言、下村元文科相の加計学園からの闇献金疑惑、それに聞くに堪えない自民党豊田真由子議員の元秘書への暴言・暴行の疑惑、といったスキャンダルが次々に明るみに出されました。

■東京都議会選挙

この七月二日に行われた東京都議会選挙では自民党が「歴史的」大敗をしました。その代わり小池百合子都知事の都民ファーストの会が大勝して都議会の過半数を占めるにいたしました。これは(まともな)新聞各社の分析では、安倍政権の腐敗・おごりに対する国民の怒りの審判だとしています。これは正しい分析だと思えますが、問題はその受け皿となった小池百合子都知事の「都民ファーストの会」が、今後どんな政治を展開していくのか、ということになるでしょう。

実は小池百合子氏は、選挙当日にも自民党員であり(選挙後離党手続きをしたというが)、かつ戦前の明治憲法下のファシズム社会をめざす極右団体として有名な「日本会議」に所属をしていることは

知られています。さらに選挙の翌日には、小池氏は「都民ファーストの会」の代表を退くことを表明し、その後継の新代表に野田数^{かず}という人物が就任したと伝えられました。この人物はすこぶる芳しからぬ評判の持ち主であり、「日本会議」のメンバーで、東京維新の会時代の二〇一二年には何と「日本国憲法の無効と大日本帝国憲法の復活」の請願を都議会に提出した人物であるとのこと。また公金横領でアントニオ猪木氏から刑事告訴をされていると報道されてもいます。

今後、この小池氏と「都民ファーストの会」がどのような活動を展開していくのか。こういった事実を冷静に考えてみますと、都民ファーストという政治団体が、どんな政治活動を展開しようとするのか、今のところ「不明」としか言いようがないところですがこれらの事実を考えると、あまり期待できないところでしょう。まして小池氏が国政への進出を考えているとされていることからしても、国民はぜひ注意深く監視をしつづける必要があります。

今回「都民ファーストの会」と協力をした、コウモリのような公明の当選は前回と同数ですが、それに対して野党側は、共産党が二議席の増加、民進は二議席の減、となっています。

「安倍政治を許さない」という票が、「都民ファーストの会」のようなまだ正体の分からない勢力に向けられた、ということは非常に残念なことです。「まともな」野党、戦争へと国民を駆りたてる安

倍政権の企てる改憲を止め、現憲法を守り、民主主義を守るというまっとうな野党勢力を求めるという国民の大きな願いを受け止めるための、その受け皿が、現時点では明らかに存在せず、その受け皿作りを作ることが国民の緊急の課題になるものと思われまます。この正否が、今後の日本の将来を決定するといつて過言ではないでしょう。

この選挙戦の中で、特に象徴的だったのは、選挙戦の最終日、安倍氏が秋葉原で、ただ一回街頭演説に立ったとき、「安倍辞める!安倍帰れ!」の大コールがわき上がり、マイクの音量を最大にしても安倍氏のスピーチがかき消されるほどになったのでした。この大コールについて当日のNHKニュースは、全く伝えず、機械的な処理で抗議の声を消去して安倍氏のスピーチだけを長々と放映しました。さらにこの場で、総理大臣たる安倍氏が「こんな人たちに負けるわけにはいかない」と叫んだのでした。この言葉に対して多くの批判がなされています。ジャーナリストの江川紹子氏は「安倍さんの考えに共鳴する人たちだけでなく、反対する人々を含めた、すべての国民に責任を負う立場だろう。仲間や支持者だけではなく、批判勢力を含めた、あらゆる国民の命や生活を預かっている。なのに安倍さんは、自分を非難する人々を「こんな人たち」という言葉でくくってしまい、それに「私たち」という言葉を対抗させ」と指摘しています。(そもそも内閣総理大臣の肩書きで、選挙応援演説をするこ

とは公職選挙法に抵触している可能性が
大です)

また稲田防衛大臣が応援演説の中で
「自衛隊・防衛省とも連携のある〇〇候補
をお願ひしたい。防衛省、自衛隊、防

衛大臣、自民党としてもお願ひしたい。」
と、明らかに自衛隊の政治利用発言した
ことも大問題です。この件については、

コラムニスト小田嶋隆氏は、「素人目に見
ても、あり得ない発言だ。なにしろ、現
職の防衛大臣が『防衛省、自衛隊、防衛

大臣、自民党としてもお願ひしたい』と、
はつきりと個々の役職や組織の固有名詞
を具体的に列挙して、その名前において

特定の政党の候補への応援を要請してし
まっている。これは取り返しがつかない。
この中の『防衛大臣として』の部分

が、『公務員等の地位利用による選挙運動の
禁止』を定めた公職選挙法に違反するこ
とは、公務員であれば誰でも知っている

ことだ。『自衛隊として』の部分は、
さらにスジが悪い。防衛大臣が全自衛官
を代表しているかのように聞こえるこの

言葉は、同時に自衛隊のトップである防
衛大臣が、部下たる自衛隊員の投票行動
をコントロールする意味を持っている。

それ以上に、自衛隊という国家にとって
唯一無二の実力組織を、防衛大臣が、選
挙のために利用することを示唆したこの

もの言いは、自衛隊を『私兵化』してい
ると言われても仕方がない」と指摘して
います。全くその通りです。
この稲田という人物は、このポストに
居座る能力も責任もないことは明白です。

(トランプ政権のマティス国防長官は稲
田氏と会談した後、この稲田氏で大丈夫
なのかとあきれ果てたと報道されていま
す。)

さて前号からこの一ヶ月間に起こった
ことを振り返ると、やはりこの問題が重
大です。

■共謀罪

共謀罪が全く不当な手続きの異常な採
決によつて参議院を通過させられ、成立
してしまいました。その後すぐに安倍氏
は、改憲のスケジュールを加速すること
を発表しています。

六月十五日の早朝に参議院を通過させ
られた共謀罪の成立経過は、法務委員会
での裁決をすつ飛ばして、参院本会議で
「中間報告」と称してむりやり採決をす
るという民主主義を破壊するでたらめな
議会運営による強行採決でした。

共謀罪はしばしば「平成の治安維持法」
だと表現されますが、大正十四年の「治
安維持法」成立のときの新聞記事は、歴
史の証言として重要だと思ひますので、
今回はそれをご紹介します。

朝日新聞、大正十四年五月八日付けの
記事。見出しは「治安維持法は伝家の宝
刀に過ぎぬ 社会運動が同法案のため抑
圧せられる事はない 警視庁は語る。」と
され、記事には次のような記述がありま
す。「労働者や思想家たちはあまりにこの
法案を重大視し悲観的に考へているよう
であるが(中略)伝家の宝刀であつて余

り度々抜くつもりでもない」だから世間
の人が心配する程のものでなく、この法
のために今の社会運動が抑圧せられるな
ど云う事はないだろう、吾々(われわれ)
の方ではまだこれが適用の研究もしてい
ないし、特に巡査諸君の教育などもして
いない」「純真な運動を傷つけはせぬ」。
当時の政府から、このように説明がさ
れていたのです。これは今回の「共謀罪
法案」の政府説明に何とよく似ているこ
とでしょう。金田法務大臣が繰り返し答
弁した「一般人には適用されない」とい
う言葉そのものです。適用範囲をあいま
いにして、「伝家の宝刀」であつて、めつ
たに使うものではないと当局は説明して
いるのです。

しかし歴史を振り返れば、この「治安
維持法」がやがて、三年後に「国体変革」
を目的とする者の最高刑が死刑に改訂さ
れ、国民の言論封鎖と弾圧に猛威をふる
うことになったのです。「治安維持法」に
よる逮捕者は数十万人を超え(二八年か
ら四五年)、送検された人は七万五千人
(同)となっています。同法の弾圧が原因
で命を落とした人は、わかっているだけ
で一六八二人となっています。

こういった言論弾圧の結果、日本はア
ジア諸国への侵略から戦争の底なしの泥
沼へととはまりこみ、二つの原爆が投下さ
れ、わが国が焦土となるまで止めること
ができなかつたのです。その元凶の一つ
である「治安維持法」の始まりと、今回
の「共謀罪法」が、これほどまでに似て
いることに衝撃を受けま

す。ぜひとも安倍政権を打ち倒して、この
悪法「共謀罪」を廃止する必要があるの
です。

■加計学園問題

加計学園問題では、前川前文科省事務
次官の証言に加え、文科省内から次々と
政権のトップの「意向」を示す内部文
書の存在が明らかにされてきて、安倍首
相本人とそのごく側近である萩生田副官
房長官の関わりが暴露されてきましたが、
通常国会が延期されずに終了してしま
いました。

野党四党は、憲法の規定に基づいて臨
時国会の開催を要求していますが、政権
はこれを無視し続けて、臨時国会を召集
しようとしません。これは明らかに憲法
違反です。

ただし東京都議会選挙の大敗を喫した
自民党は「閉会中審査」を開催すると言
いだしました。しかしこれは安倍首相が
G20で外遊中に開き安倍氏本人は出席
なし、というものです。これに対して民
進党が妥協してしまつたというのですか
ら、民進党の姿勢もあきれたものです。
「深く反省をする」「説明責任をはたす」
と幾度も言いながら、このように追及か
ら逃げまくる、安倍氏の無責任さ不誠実
さは言語道断。

安倍首相の出席の場で、前川氏をはじめ、
加計孝太郎氏、萩生田副官房長官などの証
人喚問を是非とも実現して、「官邸トップ」
の不正を徹底的に解明すべきです。

また加計学園問題の国会での質疑の中

で、森ゆうこ議員の追及が話題になりました。その豊富な資料をもとにした鋭い質問と、正しい怒りをすさまじい迫力をもって理性的に追及する姿勢が、共感を呼んだのだと感じます。

■第三の疑惑

森友・加計学園問題に続いて、驚いたことに第三の疑惑の疑惑が浮上していることを、みなさんはご存じでしょうか。これは今年四月に成田市に開設された国際医療福祉大学の医学部にまつわる疑惑です。加計学園の場合と、疑惑の構造はほとんど同じなのだといえます。これも安倍首相の意向がもろに反映できる「国家戦略特区」として認可されたものです。成田市は二十三億円相当の土地を無償貸与して、建設費用の約半分の約八十億円も市・千葉県で補助金を出し負担したというのです。国際医療福祉大学グループが短期間に急拡大したのは、政治力による影響に負うところが大きいと見られているとのこと。

この経過にも、不正が行われた可能性が高く、加計学園問題に続いて、さらに追及が必要です。

■「国家戦略特区諮問会議」

ここで加計学園問題と国際医療福祉大学で出てくる「国家戦略特区諮問会議」なるものの正体が何か、ということが問題になってきます。実はこの「戦略特区」は、地域を絞ってそのエリア内に限り従来の規制を大幅に緩め、外国企業を誘致

する計画とされていきました。またこの特区では「解雇ルール」「労働時間法制」「有期雇用制度」の三点の見直しを対象としているといえます。

この制度の発案者は、この欄でも幾度も取りあげてきた「学者」（兼政商）竹中平蔵ということです。その説明によれば『この国家戦略特区（国家戦略特別区域）は、今までの特区と異なり総理が主導の特区であり…この特区を活用して岩盤規制に切り込みたいと思っている』ということだそうです。したがって総理の主導、いいかえれば不当な身びいきも想定内であり、これによって加計学園の件が推し進められ、また同様な経過で成田の国際医療福祉大学も建設されたというのです。日刊ゲンダイによれば「加計学園問題をきっかけに、国家戦略特区の実態が明らかになってきた。『岩盤規制の打破』を名目に、仲間内や特定企業に利益を分配してきた疑惑である。それを、わずか四人の閣僚と、五人の民間議員がトップダウンで決めてしまうのだ。」

実に問題の多い制度なのだが、『ミスター特区』ともいえる存在が、東洋大教授の竹中平蔵氏。「小泉政権の構造改革特区の時代から、常に特区制度に寄り添い、レントシーカー（利権屋）として暗躍してきた。安倍首相に特区制度を提言した張本人ともいわれ、もちろん国家戦略特区の諮問会議にも名を連ねている。」「昨年七月、神奈川県の特区内で『家事支援外国人受入事業』が規制緩和された。その事業者に認定されたのが、大手人材派遣

会社のパソナだ。竹中氏はパソナグループの会長を務めている。つまり竹中氏は自分の会社（パソナ）に有利な制度を、諮問会議で主張・答申をして、利益を誘導しているというわけです。

竹中氏はパソナグループの会長の他にオリックス社外取り締りでもありますが、兵庫県養父市の農業特区では、諮問会議の答申により株式会社農地が農地の所有が可能になり、このオリックスが農地の所有に乗り出しているのです。これも竹中氏との関係の疑いがもたれて、国会で山本太郎議員が追及をしています。

「竹中氏は強硬な新自由主義者で『完全自由競争が最も経済を発展させる』が口癖ですが、実際にやっていることは、コネや肩書を利用した非・自由競争によるビジネスです」と『国家戦略特区の正体』の著者で立教大教授の郭洋春氏は述べています。

実際、日本に「非正規労働を導入」してわが国の労働条件を悪化させた、深刻な格差の拡大を招いたのにもこの人物が深く関わっています。彼はかねてから「正規社員は最後の利権である」「労働者はすべて非正規にして、労働力の流動化をはかるべき」といったことを主張し続けているのです。これは賃金をできるだけ安くして労働者の立場を不安定化して、企業の儲けを最大化していくことをねらっているのです。その一方で竹中氏は国内最大の派遣会社パソナの会長をして大儲け。小泉内閣当時には、小泉氏は郵政民営化担当大臣を任命されて法案作成にあ

たりましたが、これは郵貯・簡保の資金を外資に売り渡すためであったと批判されています。

このような人物が政治の中枢で政策に影響を与え続け、利益相反の罪にも問わず、思う存分暗躍させるような政治を許すことはできません。

参考までに、この竹中平蔵氏の語録をここでご紹介しておきましょう。「正社員をなくしましょう」「正規雇用という人たちが非正規雇用者を搾取しているわけです」「正規（社員）は守られすぎている」

「若い人には貧しくなる自由がある、貧しさをエンジョイしろ」「格差が広がっている。だから正社員も非正規並みの待遇にすれば格差はなくなる」「あらゆる分野を規制緩和しないといけない」「団塊の世代の中間管理職が失業すると仕事はない理由は簡単で、役に立たないからです」などなど。非正規雇用を広めて労働者の権利を奪い、労働者の生活の不安定化・貧困化を推進し、自分は人材派遣会社大手のパソナの会長に納まって大儲けする竹中平蔵氏。このような人間が暗躍をしている事実をもっと日本人は知らなければいけない。そしてこの暗黒政治を終わらせなければならないのです。

■おわりに

ここに来て「森友学園」への国有地売却問題の担当局長として、国会での追及に「不当な働きかけはなく、記録も残っていない」「個別に確認は差し控えさせていたきたい」と、記録を隠しのりく

の課題です。

前々回のこの記事で、安倍政権は世界標準で言って「ファシズム政権」だということを書きましたが、さらに横行する醜い身びいき不正から「マフィア政権」だという指摘があがっています。

今回の東京都議会選挙では、このようにも奢り腐敗した自民党・安倍政権に対する都民の怒りが、自民党の歴史的大敗という形で表現されたといえます。しかし自民党が変わって大躍進をした「都民ファースト」なる政治集団が、果たしてどんなものなのか。どんな政策を展開するのか。未知数があまりに多いのが実情です。これが国政に進出すると見られているのですが、小池百合子氏と「都民ファーストの会」の新代表となった小野数という人物の危険なプロフィールを考えると、とんでもない存在である可能性が高い。都民と、ひいては日本国民は「前門の虎、後門の狼」のことわざ通り、またさらに災厄を抱え込んだ可能性があるとも言えます。

私たちは、国民の怒りの正しい受け皿を早急に作る必要があります。そのためそれぞれの生活の場で、声を上げていきましよう。

最後に、児童文学作家の加藤純子さんの言葉を引用しておきます。現在私たちが置かれている状況が、やさしく適切で、しかし鋭い言葉で語られています。

「知らない間に、私たちの国がとんでもない方向へと、運ばれていっています。『秘密保護法』に始まり、『安保法制』そ

して『共謀罪』。一部の大人たちが、わけのわからない理屈をこねながら、子どもたちの未来に重苦しい灰色のレールを敷こうとしています。子どもたちは、そのことを知らずに大人になっていきます。そしてある日、こうつぶやきます。

『なんで、あの時、大人たちは、反対の声を上げてくれなかったの？ ぼくたちの、私たちの未来が、明るく希望にあふれ、かがやきに満ちた社会になるよう、なぜ努力してくれなかったの？』と。

そんな悲しみを、子どもたちに背負わせてはなりません。

人間が人間として大切にされ、尊重される社会になるよう、今こそ私たち大人の、踏ん張りどきです。」

(追加) 国民の多くの要求にもかかわらず、NHKは国会審議の中継をほとんどしません。ニュースでも政府側の答弁を中心にしか流さない姿勢を続けています。しかし我々国民としては国会でどんな議論が行われているかを是非とも知っておきたいものです。

ネットの環境では、衆議院・参議院ともにそのホームページで、審議の内容をネット中継しており、また過去の審議についても日時や質問議員の名前などから検索して見ることができるようになっていますので、ぜひこれを利用して、誰がどんなことを言っているのかを自分で確かめることをお勧めします。

老人☆よもだ帳(40)

坂本 一光

◆災害は自然にもある政治にも

自然の災害で人の力の何と無力かと見える災害であっても、被害を決定的にした要因が人的社会的なものであればそれは天災ではなく、人災と言うほかない。労働災害や原子力発電所の事故にしても、その根底には人的社会的な要因がある。それは決して自然現象ではない。それでは政治の世界はどうか。

国政であれ地方の政治であれ最近の政治の現象を見ていて、この国の政治は、劣化などという段階を遠く過ぎてははや災害(もちろん人災)の段階に至ったのではないかと、と素老人は呆れる。まるで、国民に対する政治的加害―安倍政治がもたらした、そしてこの政権がなお続けばさらにもたらすであろう弊害は甚大で、安倍政治はまれにみる、人災の極みと言うべき政治である。素老人川柳も怒る安倍政治(その周辺を含む)の人災たる側面。

政権を投げた男のコントロール
祖父満蒙孫ホルムズを生命線
朝に道問えば夕べに道半ば
政治家が問えば知恵出す春の闇
付度が神風吹かす春の闇
森友も加計も仲良くアベの傘
腹心の友共謀の友になり

アベ政治の周辺に当たり散らせば、

不正や、不正の隠蔽、居直り、国民をバカにした暴言、あまりに質の低い大臣たち、高級官僚の人事を支配して公務員を国民の「公僕」でなく一部の者たちへの「僕(しもべ)」とする。そしてなにより、国民を戦争へと駆りたてていく危険な安倍政権の改憲への加速。
国民は正しく怒り、この怒りを、安倍政権を倒す方向にまとめていくことが緊急

公明の意味を思わず辞書で引き
維新とは何をご維新されますか

また、少々古いネタであるが、

みんなとは一体誰のことですか

さてさて、汚染水はコントロールされている、との嘘でオリンピックを招致したかと思えば、今度は嘘の上塗り、オリンピックのためのテロ防止対策と偽って共謀罪をこり押しした安倍総理（総理の汚染水コントロール発言の直後から、東電の原発事故担当者は「コントロールされているとはいえない」、と認めていた。また当初の掛け声、『震災復興五輪』などどこへ吹っ飛んだのだ）。特定秘密保護法・安保法制（戦争法）・TPP（トランプによる挫折中）・辺野古埋め立て（同盟こそ命）から、友だちによる友だちのための神風吹かしの森友・加計問題。塗り固めた嘘はすっかりはげ落ち、今や安倍氏は裸の王様である。議事堂で総理を取り巻き支える議員たちも然り。

また、偉大な祖父にもできなかった九条を標的にした憲法改正を安倍政治の総仕上げにするための企てについても、安倍総理の一人前のめった動きは風雲急を告げている。

読売で加憲の意味がよくわかり

である。こんな政治がなぜまかり通るか。日本国憲法はその前文に言っ。

『そもそも国政は、国民の厳肅な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである』

安倍政治がこの原理からいかに遠いものであるか、論をまたない。しかし、無力な国民もいつまでも愚かなわけではない。

針千本飲む気はないぞ永田町

そうであるならば、次は、

公明な一票蜂の一刺しだ

と、裸の王様とその取り巻きたちに、公明な一票しか持たぬ無力な国民が倍返し、三倍返しをするときである。

◇人間はいつかわかれればそれでいい

アベ人災政治に怒り心頭、罵詈雑言を並べたが、素老人は本当のところこんなバカげたことに関わりたくないと思っている。私の夢は、未来ある者に希望を語ること、たとえそれが年寄りの戯言であったとしても、である。以下、素老人中学校長の卒業生に贈る言葉。

人間はいつかわかれればそれでいい。未知なる世界に旅立つ皆さん。卒業おめでとう。私たちは、「知らないところがいっぱいあるから、出発するのです」。

出発するのです

山本櫻子

出発するのです

知らないところがいっぱいあるから
出発するのです

朝日が梢をはなれるように
風が林を吹きぬけるように
出発するのです

暗い土の中から

つき出た 草の芽

としこめられたものを
はねのけていくたのしさ

出発するのです

知らないところがいっぱいあるから
出発するのです

よるこびが波を打ちあげるように
雲に向って舟が進むように

汐鳴りが 空をかけめぐるように
出発するのです

この詩のように、知らないところがいっぱいあるから出発した皆さんは、しかし、やがて自分が如何に無知であるかを知り、自分の無力さに絶望するかもしれません。でも、忘れないでいてください。人間はいつかわかれればそれでいい、大抵のことはそれでいいのです。しかし、いつかわかるためには、何をどう学ぶか、それは何のためか、よく考えなければなりません。私たちは、

学びて思わざれば罔く
思いて学ばざれば殆く

のです（孔子『論語』）

私たちが学ぶのは、人間が生きてきた世界の客観的な体系、自然・社会・文化などです。それを学んでも自ら思うことがなければ愚かだ。知識を何のためにどう生かすか、わからないだろう。一方、自ら思い考えることがあっても、学ばなければ危うい。思いはともすれば暴走し、意味あることは何一つできないだろう。孔子はそう言っています。学ぶことと思うことを両立させるのは、私たちの問題意識、課題意識です。思うことも、この意識も、個人的で主観的なものですが、それは学ぶ対象である世界の客観的な体系を反映します。

だから、目を世界に向けてください。一見、深い絶望も見えなくても、現代のこの絶望は、目を凝らせば必ず未来の希望に通じていることがわかります。人間らしいやさしさと知性があれば、人間はこの世界でもっとうまくやって行けるのです。それは、誰もが本当は知っていることです。だから、誰もが世界を変えられることができます。

私の中に人類を見なければ

人類はどこにも永遠にいない

こんな時代は、かつてなかったのです。人間はいつかわかれればそれでいい。その覚悟を忘れず、大いなる気概をもって、人間と世界を学び、思い続けてください。（かたちは心であり、心はかたちになる）
■大分の素老人

現代ギリシヤを語る

祖蔵 哲

ギリシヤを語るにはやはり今日の経済危機を避けては通れない。私がギリシヤを訪れたのは六月初旬。その時には七月五日の国民投票は決まっていた。前回も書いたが、旅行中には特に変わった動きは見られなかった。交通機関、公共施設、銀行等も平常であるしデモもない。ホテルでのサービス、商店での対応など特に他国と比べても変わることはない。壁の落書きは多かったが、それも他国と比較しても特にというでもない、外国を旅すると日本という国自体が異常に清潔な国に感じられる。

政治的なボスターもそんなには揭示されていなかった。そして日本に帰り、しばらくして投票が実施され答えが出た。私たちは日本人にとっては大変意外なギリシヤ国民の意思表示であった。ギリシヤ人は働かない、公務員が多いそして税金をこまかくこんなギリシヤ評がマスコミを通じて流されている中、何で自らの借金を返さないで開き直れるのかと誰でもが思う。さらに助けの手を差し伸べているドイツをなぜあれだけ非難できるのか理解しがたい国民である。結局、国民投票の結果を脅しに借りている金を返さないという理由にしようという駄々子にも似たが幼稚な国であると思ったりもする。しかし、ギリシヤの歴史と現在の国際経済情勢を憂う者にとってそれは真実ではない。

私はギリシヤ旅行中になんとか現地の

ギリシヤ人に現状を聞く機会がないかががっていた。当然、ギリシヤ語はしゃべれないし、つたない英語力では微妙な質問はできない。しかし、幸いに現地の日本語ガイドがいた。もう二〇年以上もギリシヤに住んでいるという。意外な答えが帰ってきた、ギリシヤ人はドイツを信用していないという返事である。どういうことなのであるか。

前回は遺跡を巡っての古代ギリシヤの歴史を辿った。ギリシヤは紀元前三〇〇〇年のエーゲ文明から始まる。その後クレタ、ミケーネ文明に引き継がれドーリア人の南下により現在のトルコ西方とイタリア南部までおよぶ都市国家連合によるギリシヤ帝国が作られた。この時期、紀元前五〇〇年頃がギリシヤ哲学の最高期であり民主主義や数学、自然科学もいわゆる西欧文明の基礎が作られた。しかし紀元前四〇〇年頃マケドニアのアレクサンダー大王に征服されてからのギリシヤはローマ、東ローマ帝国そしてオスマントルコと、一八三〇年に独立するまで長きに渡り主権をうばわれた植民国家であったのである。さらに一九四一年ナチスドイツなどの枢軸国により分割され戦後は冷戦期の影響をもろに受け軍事主義、社会主義政権などのもとで常に政治的混乱にあった。ギリシヤ哲学はローマが三二三年のミラノ勅令でキリスト教を公認が公認されるまでヘレニズムの哲学として学問の中心であったがその後は忘れ去られた。再認識されたのは皮肉にも十字軍がその聖地を回復するという理由で侵略したイスラム世界で温

存されていたギリシヤ哲学を発見してからである。このようにギリシヤは文化的にも政治的にも西欧世界の中心であり辺境でもあり続けた。これは前回でも述べたが、ギリシヤが西洋世界と東洋世界の接点にあり文化、民族の流動地域であったという地理的、歴史的背景も大いに関係している。

このような背景の中にありギリシヤのドイツに対する感情は他の西欧諸国がナチスドイツに対して抱く想いものがある。それ以上にある思いは列強諸国による経済侵略の被害者意識である。そもそもギリシヤがユーロを導入したのは二〇〇四年十一月であるがこの時点ですでにユーロ加盟の経済的安定条件を満たしていなかったといわれている。それが発覚したのが二〇一〇年に政権が交代した時である。次の年二〇一一年には今回と同じように国民投票を盾に支援策の取引をしている。その支援策実施の四年経過後の現在、事態は少しも改善されていないのだ。緊縮財政要求、景気低迷、失業率の低下、財政悪化、緊縮要求。この繰り返しの繰り返しである。確かにギリシヤには主たる産業がない、観光業と農業くらいである。しかし国民が働かないというのは嘘であり、労働時間は日本比べてもあまり変わらないくらい長い。しかし、日本にも言えることだが、労働時間が長いことが誇れることであろうか。労働時間と勤勉との関係は古典的な感情だけのものである。私は欧州を旅してよく言われる。日本人は気の毒だ、なぜなら我々は休暇を十分に楽しんで君らと同じくらいの仕事をしていると。

さて、ギリシヤにとってドイツは自国を喰い物にしている悪い国と見られていると日本人ガイドは言っていた。ドイツの銀行はギリシヤ国民に対して借金を勧めている。テレビではカード会社がクレジットカードの宣伝をし、銀行はローンをどんどんと組むよう仕向けている。しかし借金が返せなくなるかもしれない国民にたいしてなぜ銀行が競って金を貸すのか。誰も返してもらえそうにない人に金は貸さない。その秘密はこのようなものである。そもそも二〇〇四年にギリシヤはすでに財政赤字がすすんでおりユーロへの加盟条件が満たされていないのに粉飾を指導したのは世界的な投資会社であると言われている。この会社は負債を債権として処理できる商品をギリシヤに売りつけ決算をこまかく手管を指南していたのである。この投資会社の元重役が欧州中央銀行ECBの総裁と聞いて私も驚いた。つまり事態はこういうことである。国際金融資本とドイツという欧州の盟主が手を握りギリシヤ等の弱者を餌食にしていると。こう言うとか陰謀説のように聞こえるが事実である。

二〇〇八年に起こった世界規模の経済危機リーマンショックはサブプライムローンという信用力の低い低所得者向けの貸付不良から発生したということとは覚えておられるであろう。これと同じことが国家単位で起こっているのである。私は経済学者ではないので詳しいことはわからないが、こういった取引はいわゆるリスクを回避するヘッジ商品と言われ、そのリスクを分散するために実物の数字を変数に置

き換え債権としているのだとか。これを考えた経済学者は一九九七年にノーベル賞を受賞しています。過去にも言われた二〇〇八ことであるがまさしく死に体の動物に集る秃鷹フアンドである。人間の知恵は恐ろしい。ノーベル賞という人類最高の理性がこのような行為を可能にするのである。こういった金融商品で利潤をあげているのは巨大資本家である。本来、赤字になっっているのは銀行である。しかしその銀行の債権を買って助けているのが国家である。国家とは国民の集合であり税金により成り立っている。つまり現在では巨大資本家が国家を従属させているのである。

ドイツ国民はギリシャが怠惰である、そんな国になぜ金を貸すのかそして返さないと開き直っていると怒っている。しかしそのドイツもそのような事が言える資格はない。ドイツは第二次大戦後二回も債務の半減の特典を受けている。戦後の復興促進のためである。ギリシャは景気後退のスパイラルに落ち込んでいる。やはりデフォルトを実施し構造的な経済立て直しをすべきである。デフォルトによって再建できた国は多くある。デフォルトを恐れるのはドイツではなく国際金融資本家である。しかし彼らの頭は我々の想像を超えている。このような危機でさえ自らの利益にできるのである。ドイツさえ彼らは支配できる。我が芥川だよりで現在話題のTPPであるが、筆者も書いておられるように最大の問題点はISD条項にあります。Investor-State Dispute つまり『投資家対国家の紛争』の投資家とはこの国際金融

資本のことです。その拠点は米国ではありませんが彼らにそもそも国家の概念はありません。アメリカ合衆国の建国精神は個人のための国家であり国家が個人を規制するという発想はありません。これが自由主義です。でも待つてその前に民主主義ではないのという人もいます。民主主義というのは絶対主義や独裁主義に対する言葉で単に国民に主権があるというだけで北朝鮮でも中国でもサウジアラビアでも形だけの選挙をして国民の代表だといって政治をすればそれで民主主義になるのです。その前に多数決という民主主義につきものの決め方があるじゃないのという人もいます。しかしこの多数決というのは民主主義と常にセットで登場しますが必ずしも大多数の意見を反映させるシステムではないというのが、たとえば社会選択理論においてアローの不可能性定理というもので証明されています。よくマスコミの誘導や経済状況などの影響もあり多数決による議会制民主主義がうまく機能していないと言われますが、そうではなく制度そのものに大いなる欠陥があるということとは自覚しなければなりません。だから選挙によって選ばれた者は決して全権を委託されたのではないのです。古代ギリシャにおいてソクラテスは裁判で有罪にされ毒杯をおおって死んだとは有名なソクラテスの弁明にありますね。あの時期アテナは完全な民主主義でした。そして史上もつとも民主的な憲法下にあったドイツでナチスが独裁政権を確立したことはよく知られています。

資本主義というものは資本すなち資源と

それを商品にかえ価値を与える労働力がありその二者から搾取し再生産する資本家という三セットで成り立っています。この三つのどれが欠けても資本主義は成り立ちません。しかし現在、石油などの天然資源の枯渇や未開発地の減少といった資本の欠乏に加え、安い労働力を調達できる国際労働市場がなくなつてきています。最後のフロンティアとされるアフリカも欧米はもとより中国といったかつて安価な労働力調達国によって開拓されつくしつつあります。こういった資本なき資本主義の状況にあり彼ら国際金融資本家たちはどこから富みを得ようとしているのでしょうか。ここまで読んできて勘の良い読者ならもうお分かりであると思います。そうです、バーチャル空間で富みを得ることが彼らが今やっていることです。しかし実態経済を反映しない仮想空間での経済活動は必ず破綻します。それがバブル経済の仕組みなのです。そしてこのゲームの胴元である国際金融資本家が常に利益を得ています。これが現在の世界経済の構造です。もともと彼らには国籍はありません。国に従うのではなく国を従わせるのが彼らの自由の本質であるからです。今月は本業をかなり逸脱し、しかも学説ならざる私見のみで筆を走らせてしまいました。皆様が普段、新聞や雑誌などメディアではあまり聞きなれていない傾向の話をしましたので抵抗を持つかたが多々おられると思います。深く反省しております。次回の本業に戻りまして、新自由主義の哲学的背景を考察してまいりたいと思っております。

大峯奥駈道(10)

梵店主

よつちゃん歩きたい奥駈道は、一般に大峯講として親しまれている洞川から山上ヶ岳に登るルートとは違う。洞川からのルートは登りやすく時間も四時間もあれば登れる。まあ、愛宕山を少し高くしたようなものである。山上ヶ岳の宿坊で宿泊したり、日帰りで登る時も、洞川の温泉宿で精進上げと称して宴会をする。いわば男達の根性試しの遊び的な要素が多い。昔は遊郭もあつたぐらいだから、女人禁制は男にとつては都合がいいのだ。よつちゃんの同級生も大峯講の世話役をしている。一度誘われたが、都合が悪く行けなかった。彼は、断り切れずにやっているとぼやいていた。毎回人を集めるのが大変みたいである。

また、大阪の友人も、ある会社の社長に誘われて登った。山上ヶ岳に登って洞川温泉で宴会をして、そのあと夜明けまで温泉街の飲み屋をはしごしたという。

まあ、そんなことはよつちゃんには関係ない事である。よつちゃんが目指すは修験者が歩くけわしい尾根伝いの道であるから、洞川の宴会とは無縁である。

しかし、えらそうに言っても山を下りればどこかの店でビールを買って飲むのだから同じようなものではある。山と酒は切り離せない。

よつちゃんは、思い切つて大江君に連絡した。奥駈道と一緒にしようという誘いである。すぐに返事が来て「申し訳な

大人の今昔物語(35)

石川 吾郎

いですが、自信がありませんのでおことわりします」といつてきた。よっちゃん

は、まあ仕方がないわと諦めた。
五十半ばの大江君が自信がないという

くらい難しい山なのだと思うと舞い上がっているよっちゃんは、いつそう奥駆道に興味がわいてきた。

遠い昔、修験道の開祖といわれる役行者が修業したといわれる非常に厳しい奥駆道とは、いったいどんなところなのか、そこでどんな行をおこなったのか。疑問が尽きない。

よっちゃん、これまで多くの山を歩いてきたが、山に安らぎや癒しを感じたことはあまりなかった。苦勞して登っている時に考えるのは、下りたら風呂に入

ってビールを飲み、飯を食って布団で思い切り寝る。かなしいかな知的好奇心は少しも持てず飲食への欲望だけがあつたのである。

多くの登山者のように山の景色や草花に興味を惹かれることもなく、ただ歩いて登り下りて飯を食う、すべてが単純な筋書きの山行をしてきたのである。
知的な感性から無縁だったよっちゃん

が、追い求めていたのは、自分の空虚な心を満たしてくれるものである。それがどんなものかは分からないが、何とかしてつかみたいと考えていた。

こんなよっちゃんの、気持ちちが奥駆道に傾いた大きな理由だった。自分の人生を振り返ってみても、大したことは何も

していない。大口をたたきただけでずいぶん周りの人に迷惑をかけてきたにちがいない。この歳になつても自分の生き方が定まらない。迷いを消し心静かにするた

めに何をすべきか考えあぐねていたが、もしかすると、大峯奥駆道は何かしらの答えを与えてくれるのではないかと、よっちゃんは考えたのである。

修験道とは、自然と一体になつて山中を歩くことだと聞いた。風に自然の息遣いを感じ、雨に打たれて自分を浄化する。詳しくは知らないが、大昔の修験者は山の靈感を得て不思議な力で加持祈禱を行

つたのだろう。今も、よっちゃんが参る愛宕山の千日参りの夜には、修験者が多くきてゴマ供養をする。真言密教の寺に

は、護摩焚きをする広場がある。人の願いをゴマ木に書いて燃え盛る火のなかへ掘り込んで焼き、その火の粉を天高く舞い上げて天の神に届けるのだろう。

今では、めつたに見ることがなくなつた修験者も明治初期までは多くいたらしい。全国で十数万もいたという。よっちゃん

の親しい店の主人の父も修験者であつた。神道とも仏教とも言えない独特の世界であるが、その教えは優しい。息子である主人の日頃の行いを見ているとよくわかる。

大人の今昔物語(35)

石川 吾郎

今回は、芥川龍之介の名作『芋粥』の原話です。こちらも興味深いエピソード満載です。教科書に出ない度は二／五。

利仁の將軍、若いころ京から敦賀に五位を引き連れていく話(第二六卷第十七)

今は昔、利仁としひとの將軍という人がいた。若い頃は某と名乗っていた。そのころ關白基経に仕えていた。越前国の某の有仁

という豪族の婿だつたので、普段は越前の国に住まつていた。

あるときその主の殿(基経)に、正月の大饗(大宴会)が行われた。当時は大饗が終わると、取食とりばみ(屋敷の使用人に余

りを庭に投げ与えた)という者を追い払つて入れず、大饗の残りをその殿の侍たち

が食べていた。そこに長年仕えて五位の位まで昇つた侍がいた。その大饗の残りを侍たちが食べている中で、この五位、その座で芋がゆをすすり、舌打ちをして

「ああ、どうかしてこの芋がゆを飽きるほど食べたいものだ」と嘆息した。利仁

はこれ聞き「大夫どの、芋がゆを飽きるほどお食べになつたことはござらぬか」と言う。五位「まだありません」利仁「では、飽きるまでご馳走してさしあげましょう」五位「これは嬉や、ぜひとも」

と。この後、四五日ばかり経ち、この五位

は殿の屋敷に住み込んでいたが、そこに利仁がやってきて五位に言う。「さあ参り

ましょう、大夫どの。東山の辺に湯を涌かして用意をしております」と。五位「そ

れは嬉や。昨夜は身体が痒うて寝られませんでしたによつて。ただ、馬を持つと

りません・・・」と言うと、利仁「馬はここにご用意いたしております」。五位

「ああ嬉や」と薄綿の着物を二枚ほど、青鈍あおにび色の指貫さしぬきの、裾の破れたのと、同

じ色の狩衣かりぎぬの着古して肩が少し落ちてきたのを着て、下袴もつけず、高い鼻先

は赤らんで、鼻水が出てきてもぬぐわずにいると見える。狩衣の後ろは、帯で引き

きつっているのを直しもしないでそのままになつているので、見ていて可笑しく

なるさまだが、五位を先に立てて、共に馬に乗り、鴨川の河原にさしかかる。五

位のお供には、子供の使用人さえない。利仁の供にも、武具持ちの従者が一人と

世話をする従者が一人だけが従っている。

*

*

さて、河原を過ぎて栗田口あわたぐちにさしかかる。五位「どの辺りですか」と尋ねる

と、利仁「もう少しです」と答えながら、そろそろ山科も過ぎてしまう。五位「近

い所といいながら、山科も過ぎてしまふとは」となじる。利仁「ほんのもう少し」

と答えながら、逢坂山も過ぎてしまひ、三井寺の、かねてより知り合ひの僧のも

とに行き着いた。五位「そうか、ここで湯を涌かしているのか」と、ここですえ

「むっちゃ遠かった」と思うが、主の僧は「不意のことなので」と、接待をするが、しかし風呂を振る舞ってくれる様子は少しもない。五位「風呂はどこですか」と問うと、利仁「実は、敦賀までお連れ参るところでございます」と言う。

五位「なんと常識はずれなお方。京を出るときにそのように言っていたければ、従者などを連れてきたところなのに。従者もなしでこんな遠出が何でできるものか。恐ろしや」と。利仁は愉快そうに笑って「私一人がおりましたら、千人力と思つて頂いてよろしい」と言うのも、もつともなことなのだ。こうして、そこで腹を充たして先を急ぐ。利仁はここで胡籐（弓いれ）を背負う。

* * *

さてその晩は野宿をした。翌朝早く出発すると、驚いたことに午前十時ころには、二三十騎ばかりが来たまつてやつて来る。何事かと見ていると、利仁「昨夜の狐が、家に着き伝えたのでしょうか。それで男どもが迎えに来たのでしょうか」という。五位が「それとは限らんでしょう」というと、だんだん一団が近づいて一斉に馬を降り、驚いて「見ろ、まことにいいでになった」とさわめいた。利仁はにんまりして「何事だ」と問うと、年長の郎党が進み出る。「馬は用意しているか」と問うと、「二頭あります」と、食事も調べて持参してきたので、その辺りで馬を降り、食べた。

き、迎えるようにせよ」と伝えよ。もしこれを伝えぬときは、汝狐よ、ただでは置かぬぞ。狐は化けるものゆえ、必ず今日のうちに伝えよ」と命じ、狐を放した。五位「当てにならぬ使いですなあ」と言う。利仁「まあ、ご覧よ、やつは必ず伝えますよ」と答えるのに合わせるように、狐はみるみる駆けだし、まもなく見えなくなつてしまつた。

* * *

さてその晩は野宿をした。翌朝早く出発すると、驚いたことに午前十時ころには、二三十騎ばかりが来たまつてやつて来る。何事かと見ていると、利仁「昨夜の狐が、家に着き伝えたのでしょうか。それで男どもが迎えに来たのでしょうか」という。五位が「それとは限らんでしょう」というと、だんだん一団が近づいて一斉に馬を降り、驚いて「見ろ、まことにいいでになった」とさわめいた。利仁はにんまりして「何事だ」と問うと、年長の郎党が進み出る。「馬は用意しているか」と問うと、「二頭あります」と、食事も調べて持参してきたので、その辺りで馬を降り、食べた。

そのときその郎党が言うには「昨夜、珍しいことがございました」。利仁「何事だ」と問うと、「昨夜午後八時ころに、奥方さまが急に胸苦しくなられ、何事かと心配を申し上げるうちに、奥方さま自ら仰せられたのです。『自分は他でもない、今日の昼時に三津の浜にて、殿がにわか

に京から下つて来られるのにお会い致しますて、逃げようとしたが逃げられず捕らわれました。そのとき殿が仰せられるには「汝、今日のうちに我が家に行つて、客人をお連れして急に京から下ることになった。明日の十時ころ、馬二頭に鞍を置き、男どもを高島の辺りに迎えるに來させるように伝えよ。もし今日のうちに行き着き、伝えぬようなら、ただではおかぬぞ」と仰せつかりました。男どもすぐに出発せよ。遅くなれば、自分はお咎めを受けることになってしまう」と、男どもに召集して命令をしましたところ、たちまち奥方さまは回復をされました。その後、鶏鳴とともに出発したという次第でございます。利仁はこれを聞き、笑いながら五位と顔を見合はすと、五位の驚くことはなほだしい。

食事を終えて、一段落すると、舅の有仁が現れ「これはどうされましたかな。俄に京から下らせられたのは。使者の件はたまげるもの。奥方は突然病み伏せられました。たいそう心配をいたしました」というと、利仁笑いながら「試しにと、言いつけましたことを、狐が忠実に実行し、お告げに参上したのでした」と言うので、舅も笑つて「聞いたことのない珍しいこと」と、「そもそも、お連れ申すというお方は、ここにおいでになる方のごときでしょうか」と。利仁「そうでございます。芋がゆを飽きるほど食べたことがない、と仰せられるので、ぜひ飽きるほど召し上がっていただきたいと、お連れ申し上げました」と言う。舅「お安い物を、ご所望ですな」と冗談を言う。

がいる気配がする。「誰だ」と問うと、女
の声で「おみ足をさすつて差し上げよと
のことで、参りました」という。その気
配憎からず、なので、かき寄せて風の入
る所に共寝をする。

しばらくすると、大声の話し声が聞こ
えてくる。聞くと、男の声で「この付近
の下人はよく聞け、明日の朝午前六時こ
ろに、切り口が三寸、長さ五尺の山芋を、
各人一本ずつ持つて集まれ」と言っている。

よくもまあ、こんな夜更けに命令する
ものだ、聞きながら寝入ってしまった。
未だ夜明け前に、目が覚めると庭に籐を
敷く音が聞こえてくる。何をするのだと
聞き耳をたてる。周囲が明るくなって蔀
を上げて庭を見ると、長筵(むしろ)を四
五枚敷いている。何のためだろうと思っ
ていると、一人の男が木のような物を一
本置いていく。

後に続いて次々に置いていくのを見て
いると、実に切り口三四寸ばかりの山芋
の、長さが五六尺ばかりなのを持つてき
たのだった。午前十時ころまでこれが続
いてので、五位のいる建物ほどの高さに
まで積み上がった。昨夜に叫んでいたの
は、付近に住む下人たちすべてに伝達を
する「人呼びの丘」というものがあり、
古墳の上で叫んでいたのだった。ただで
さえ、その声の届く限りの下人たちが持
ってくるだけでも、これほど大量になっ
た。ましてや離れた所にいる従者たちの

多さも想像ができるというものだ。

五位が驚いてただ見ている間に、一石
入りの釜を五つ六つほど担いできて、や
にわに杭などを打ち、ずらりと並べ、何
をするのだらうと見るうちに、白い袷の
作業着を着て、中帯なかおびをして、若々しくす
がすがしい使用人の女たちが、白く新し
い桶に水を入れてやってきて、この釜に
入れる。何のために湯を沸かすのかと見
ると、この水と見えたものは甘藷あまずらであつ
た。また若い男たちが十人余り出てきて、
袂をたくし上げ、薄い刀の長いようなも
ので、この山芋を削りながらで切りに
する。何と芋かゆを煮ているのだった。
見ていると食欲は失せ、返つてうとまし
くなってしまった。軽く煮て、「芋がゆが
できました」と報告するので「もつてこ
い」と命じると、銀の器から大きな素焼
きの器に盛ってくるが、一盛りも食べら
れず「飽き飽きした」と五位がいようと、
たいそう笑いながら人々が集まり、「ご来
客のおかげで芋がゆにありつける」と言
い合った。

そうする間、向かいの建物の軒に、狐
が顔をのぞかせているのを利仁が見つけ
る。「(「覽せよ。昨日の狐が参っておりま
す」と。「あれに物を食わせよ」と命じる。
狐は与えられ餌を喰い終わると去ってい
った。
こうして五位は一と月ばかり利仁のも

とに滞在したが、万事に堪能した。そし
て京に上る段になると、利仁は普段着や
晴れ着など幾枚も与えた。その上、綾・
絹・綿などを革張りの行李に幾組みも持
たせた。先日の直衣のうしは言うまでもない。
また良い馬に鞍を置いて、牛も加えて与
えたので、五位は裕福になって京に上つ
ていったのだった。

もこれに特に驚いたような反応もなく、
そのまま受け入れているようなので、この
風習は少なくとも上流階級では、かなり
一般的なものであったのではないかと想像
できるように思います。尚この場面につ
いては、芥川は『芋粥』の中では省略し
ています。

まことに、一つ所に長年勤めている者
は、こんな思いがけぬ僥倖に出会うこと
にもなるものだ、語り伝えていること
だ。

《コメント》

芥川龍之介の名作『芋粥』の原話。この
原話もかなりの完成度であることをわか
つて頂けるでしょうか。ここに記述され
ている地理関係はかなり正確でリアルで
す。京都から敦賀までの行程が、現在の
JR湖西線にほぼ沿う形で述べられてい
ます。都から栗田口を通過して山科まで
は、現在地下鉄に接続する京阪線の京津
線に沿っています。

利仁の將軍は、藤原時長の子で平安時
代中期(十世紀初め)の武將。撰家藤
原氏に仕え、坂東の国司を歴任してい
て数々の武勇伝が残っているといひます。

この物語に登場する越前の莊園の有リ
様、その経済・伝達指令システムなどの
描写には興味深いものがあります。また
狐のエピソードは創作なのでしょうが、
その不思議さには何か根拠があるように
さえ思えます。

利仁の家での夜更けの「人呼びの丘」

の命令伝達システムは、注目に値するも
のです。当時の莊園では、このような伝
達が行われていたのでしょうか。しかも、
このシステムがしっかりと機能している
ことには、驚かされます。

夜伽よとぎの場面は、来客に対して性のオモ
テナシをするという当時の風習を伝えて
いて、興味深いものです。冴えない五位



明石 幸次郎

明石は、昨夜からの寝不足と移動の疲れ、それに元々、アルコールに弱い体質の為、ウトウトと船を漕ぎそうになった。

横に座っていたM居が「明石、ご苦労さんやったなあ。大分、疲れているようやなあ。どうやった？宇都宮工場は、お前が居た堺工場と違って、営業に対しては、協力的やろ！」と肩を叩かれた。

明石は、はっとして「どちらが協力的かは、私も短い期間ですが、堺にしかないの、分かりませんが、工場の違いと言うより、営業の窓口の工務課の人の性格に依るのではないでしょうか？」と言つてから、前に並べられた食べ慣れた料理を食べようとしたら、「窓口の担当者によって、同じ事を言つても対応が変わるのは、おかしいと思わんか？俺は、工場の体質と思うわ！」「まあ、そうですね。両方あるのですかね。人は環境、周りの人の影響を受けやすいので――」と言いながら、箸を動かし食べることに専念し出した。

明石は、心の中では、M居が言う営業の立場からして、工場の体質に問題があったとしても、飽く迄も、実務的な仕事をしているのは、工場の窓口である工務課の人達であり、この人らをどう説得して、こちらの言い分を理解して貰い、工場を動かしていくかしかないのでは、と現実的に考えていた。

M居は、担当者を説得して時間をかけて、言い分を通していくよりも、短絡的に、担当者を越えて、上に働きかけて、命令を出させた方が、早く結論が出て、効率的であると考えるタイプのようにある。

明石は入社七年間の経験から、仕事を進めていく上では、何よりも関係部門の担当者や仲良くなる、好かれなくても、嫌われないようにする事を心掛けてきた。その為には、電話で事を済ますよりも、出来るだけ時間を作り、担当者に会いに行つて話をして、名前と顔と覚えて貰うようにしていた。今回もそれを実践して宇都宮に東京から足を延ばして行つただけである。

その時、背中合わせに座っていた、明石と堺から転勤してきたF田が、明石の背中を突き、「聞こえて来てましたが、明石さん、優秀な人は違いますね。早速、韓国に出張ですか？大変ですね。」と言いながらビールを注ごうとしたので、明石はF田の方に向きを変えて、コップを出した。F田は、ビールを注ぎながら「明石さんは、お酒が飲めるからいいですね。私は全然アルコールは駄目なんですよ」と言った。

「そう、飲めなかったら、飲めないと押し通した方が、エエのでは。俺みたいに中途半端なタイプは駄目やね。F田君は、奨め上手見たいなので、自分が飲まなくても、きつと、飲んだふりして、相手に飲ませて、色々と本音を喋らせるA級輸出マンやね。」

「何を言われてるんですか？私なんか、外大のインドネシア語を出たC級輸出マンですよ。輸出部の外大出身者は殆ど、欧米語系ですよ。私のような亜流は駄目ですよ」と勝手に自分から言い出してきた。

「何んでー。インドネシアはアジアの大国やないか。これからは、何年かかるか分からないが、アジアが主力市場になると思つてるんや。俺は、タイ、インドネシアと中国やと思つてるんや。俺らの様な、少しだけ英語が分かるだけで、工場から引つ張られてきた人間とは、血統が違う。G1出走のサラブレッドや。工場に居たのは修業の為で、いずれ、輸出に返すと言つた人事方針で、本来の部門に戻つて来たのやから。俺なんかと違い、会社が期待しているんやで。俺が優秀やから、海外出張に行かせよと言うことではなく、俺しか駒が無いので、商社マンが後ろに付いているから大丈夫というところで、出張を決めたと思うよ。ゴメン、少し喋りすぎたなあ」と言いながら、ビールを飲み干した。同じ工場からF田とやつて来た気安さから、本音をついつい言つてしまった。

F田も「明石さんは、どう思われましたか？昨日から輸出部が変わつて今日で二日目ですが、ここは、工場とは全く違いますね。異質ですね！若い部員が伸び伸びと、自分の意見を持つて侃侃諤諤と議論しながら、仕事を進めている様に感じます。それに、仕事の時間の半分くらいは、冗談を言い合ったり、フロアーを

うろろして喋ったりして、仕事しているのか、遊んでいるのか、分からない人が何人かいますね。まあ、工場とは全然違いますね。同じ会社だとは、思われませんね。」

「そうやね。さつきも俺が挨拶していた時に、途中で野次？を飛ばしてきた人がいるが、ピンクの綿シャツとアルマーニの高そうなネクタイをしている人や。本音だけで生きている様なけつたいな人やね。同じ課にいるから、お前、なにしているんや？仕事している振りして、ホンマは、仕事を終わつたら何して遊ばかを考えてるんやろ？とか、言われそうやなあ」

「もう、既に今日、言われましたよ。お前、そんな、イライラして、髪を掻きあげるなあ。まだ、女の子やつたら、かわいいが？男がやつたら、こいつ、神経質な奴やなあ。短気な性格に違いないとマイナスに取られるぜ、と注意されました。これは、私の癖で、考え事が行き詰まると無意識にこれが出るんですね。」

「まあ、何を言われるか楽しみやなあ。あゝいう人には、多少は言い返さないと、いじられ続けられると思うよ。よく、体育会系クラブの先輩には、必ず一人か二人は、あゝいう人がいるもんでなあ。」

「ところで、クラブは何をしておられたんですか？先輩にいじられましたか？」

「中、高校は、野球部。大学は事情があり三年から山岳部に入った。高校野球は一回戦ボーイで、人に誇る輝かしい戦績はなし。ただ、高校三年の夏の大会で、

オクラの山たより (10)

困生

三本、センター前にタイムリーヒットになるはずヒットを打ったが、ランナーが三回共、ホームで憤死と言ったら、まだ、エエが、余裕でタッチアウトになり、点が入らず、結局、延長十四回で負けてしまつてヒーローになり損ねた。まあ、この試合は、俺の人生に於いて教訓を与えてくれたような気がした」

「それは、どういうことですか？」

「こんな話は、人には何の意味も持たないと思うが、自分だけの力では、どうにもならないことが世の中では、あるもので、人の協力を得て、初めて自分が何かを為せるものではないかと、この試合が終わつて、挫折の中で掴んだ教訓かなあ。仕事でも本社、工場で資材をやつて

いたが、発注者の立場で偉そうなことを言つても、協力会社から部品を供給して貰つて初めて自分の責務を果たせるのであつて、自分の力だけでは、何も出来ないわ。特に何の取柄もないB級サラリーマンの俺みたいな社員わー。君はA級サラブレッドやから、偉くなるためには、走り続けなさいといかんで！それと、俺らのような、B級のお尻を叩いて上手く働かさないとなあゝはっはっはー」と話をしていたら、

「おーい。お前ら、堺から来た二人！仲良く固まつて、何を話してるんや。あちこち、行つて、話をしたことない人と挨拶代わりに話をして来い！それが、出来ない奴は、営業マンとして失格や！」と、ピンクの綿シャツのK村が二人の傍に来て、笑いながら話しかけて来た。

清少納言の「肥満体で不美人説」につ

いては、もうあれこれと書いたので繰り返すのはよすが、「才女の晩年は惨めなもの」といった考え方は十二世紀の院政期には広く行き渡つていたらしい。たとえば、中関白家の藤原道隆の正妻である高階貴子（高内侍とも儀同三司の母ともいわれる）は歴史物語「大鏡」で「まことしき文者（本格的な漢詩人）にて、少々のをのこには勝りてこそ聞こえしか（少々漢詩文をかじつたくらいの男たちよりは優れていると噂された）」と褒め讃えた後で、次のように書く。

女のあまりに才さえ（漢詩文の才能）か

しこきは、ものあしき」と、人の申すなるに、この内侍、後にはいといみじう墮落せられにしも（この高内侍が後になって零落なさつたのも、そのけとこそはおぼえ侍りしか。（そのためかと思いました）

高内侍の零落とは藤原道隆の死後に急速に中関白家が没落したことをさしている。このあたりの事情は追いついていくつもりであるが、政治的な争いに敗北したことを高階貴子の「才」のすばらしさのせいにするのはひどい話である。どうも家父長制家族Ⅱ「イエ」が徐々に成立していった十一世紀から中世のはじめにかけて「才女の末路は悲惨」という

俗説は定着していったらしい。十四世紀に完成された能の演目に観阿弥作「卒塔婆小町」があることを御存知の方は多からう。この曲では高野山の僧が物乞いをして町を徘徊する老婆となつた小野小町に出会う。場所は摂津国阿倍野または山城国鳥羽のあたりらしい。恋を成就できなかった深草少将の怨念に苦しめられていた小町が後世の成仏を願うことが大切と悟りを得る話だが、やはり才女の小野小町の晩年は悲惨に描かれる。鎌倉時代初期の「古事談」では東北まで流れていった小町小町が野垂れ死にをしてドクロとなり眼窩から生えたススキを痛がつて

秋風のうち吹くことにあなめあなめ

と上の句を歌つたら、在原業平が

小野とはいはじ薄生ひたり

と下の句を付けたという話がある。「あなめ」とは「ああ、目が痛い」の意で、業平の句は「もはや小野小町ではないでしよう、ススキがドクロの眼窩から生えています」の意。あまり気分のいい話ではない。

さて、零落の話はこれくらいにして、では清少納言はどのような人生を送つた人なのだろうか。まず、その名前からといきたいところだが、同時代の紫式部と同じく不明というほかはない。かつて「清原諮子きよはらのなげこ」だと主張した人もいるが、江戸時代の国学者の意見で確たる論拠はない。ちなみに紫式部の本名は藤原香子ふじわらのかこであると角田文衛がかつて主張したが、

これも一般には認められていない。

彼女たちの本名はさておき、話を先に進めていくと清少納言は通説によれば康保二年（九六六）頃に生まれ、万寿二年（一〇二五）ころに亡くなつたとされている。父親は清原元輔で、元輔五九歳の子である。最終官位は従五位上・肥後守であり、任地である肥後国において八三歳で亡くなつた。他にも周防守などを歴任しており受領層といわれる文字通りの下級貴族である。ただし梨壺の五人の一人とされ、「後撰和歌集」の選者にもなつた第一級の歌人として有名であつた。また先にも述べたように「猿楽事さるがくじ」の人でもあつた。「猿楽事」とは怒り・驚き・怨み、何でもよいのだが、ともかく精神が緊張を余儀なくされているときに、それを一瞬にほどこいて明るい解放感に導くことである。要するに元輔はユーモアあふれるウィットに富んだ人物であつたといつてよい。

清少納言が幼少期にどう育つたのかは不明である。結婚は二度している。最初の夫は橘則光。「今昔物語」では「武人ではないが、きわめて豪胆で思慮深く腕力も極めて強かつた。容姿も立派で」と書かれており、従四位上・陸奥守に至つた。清少納言は一七歳の時に則光との間の子である則長を生んだとされる。橘則長は正五位下・越中守にまで至つた。「枕草子」によれば三〇歳ころに中宮定子に出仕したときには、すでに親しい関係であつても夫婦ではなかつたようであるから二人の関係は十数年で解消されたのであろう。

長保二年（一〇〇〇）に皇后定子が御座により崩逝した後、清少納言は宮仕えを辞去した。その後、二度目の夫である藤原棟世とともに夫の任地である摂津国でしばらく暮らしていたらしい。二人の間には女子が生まれている。上東門院（藤原彰子）に女房として仕えた子馬（藤原彰子）である。最晩年は二番目の夫棟世の別荘があつた京都市東山区の月輪あたりに住んでいたと通説ではされている。

ただし、皇后定子が崩逝されたあとと清少納言が残された一人の親王と二人の内親王の養育に専心したという説が角田文衛氏によってなされている。また角田氏は清少納言零落譚についても、「虚構であつて、真実ではない」としている。清少納言自身にも位田があつた上に、息子の橘則長は受領として、娘の小馬命婦は上東門院（藤原彰子）の女房として、それぞれ中流の貴族として羽振りが良かったのだから、清少納言が荒屋に敗残の余生を送つたなどというのは全くの作り事であり考慮のほかである、と述べられている。聞くべき意見であろう。

清少納言が仕えた中宮定子や一条天皇そして中関白家の人々についてはいずれ後日ということにして、まず、彼女の夫たち、そして親しく付き合った人々のことから紹介しよう。

まず夫から。順序が逆となるが、最初に二番目の夫である藤原棟世。彼がどのような人物であつたかを知るための説話などはまったく伝わっていない。藤原氏南家巨勢鷹の流れであり、官位は正四位

下・左中弁にまで至つた。父藤原保方の妹盛子^{せいし}は藤原師輔の妻となり、道長の父である兼家、円融天皇の母である安子を生んだ女性である。棟世は応和三年（九六三）のは六位の藏人になっているから清少納言とは二〇歳以上も年が離れていたはず。筑前、山城、摂津と各地の国守を歴任したから、その任の間にかの財を成していたらうと考えられる。東山の月輪の別荘もそれで造つたものだろう。最初の夫である橘則光についてはいくつかのエピソードが残っている。すでに述べた「今昔物語」は優れた軍事貴族の一人である則光の一面を書いたものだが、「枕草子」に出てくる則光は全く別の側面を見せる。有名なのは「ワカメ」をめぐると話であろう。その話は「枕草子」八四段にある。

清少納言と則光とは離婚後お互いを「兄」「妹」と呼んでいた。「枕草子」には親しげに交流していたさまの記述が出てくる。長徳二年（九九六）、清少納言は道長派の人々と通じているのではないかと中宮定子周辺の人々に疑われて一時的に里帰りしていたが、その時のこと。当時、則光は参議であつた道長派である藤原齊信^{ただのぶ}の家司をしていた。その則光がひよつこりと清少納言の所にやってくる。二人で語らう中で齊信の話が出てくる。清少納言と内裏で親しくしている齊信が則光に「元夫であるおまえが彼女の居場所を知らないわけがない。言え。」としてこく追及した。答えに窮した則光の取った行動が彼らしい。

わびて、台盤の上に布のありしを、取りて、ただ食ひに食ひまぎらはし……（困つて、台盤の上に海藻があつたのを取つて、むやみに食べに食べることでごまかした）

路上であつという間に三人の男を切り伏せた男が秘密を漏らしてはいけないと必死になって海藻（ワカメらしい）を食べている姿はおかしい。話はこれだけでは終わらない。この時、則光は清少納言から居場所を言つてはいけない（齊信と接近するとますます道長派と思われるからだ）とさんざん言われたのだが、後日、またも則光から「齊信様が居場所を言え」としつこいから、もう言つてもいいかな」と手紙を寄こした。「絶対にダメと言つたでしょう」と清少納言は則光にワカメを紙に包んで届けさせた。このワカメの謎が則光にはさっぱり分らない。「なぜ返事をくれないんだ。それに、なんだ、あのワカメは。訳が分らないよ。」とわざわざ清少納言の里に来て言う。これには清少納言もゲンナリして

かづきする あまのすみかをそこだに

ゆめいふなとや めを食はせけむ

と歌を送つた。歌の大意は、「海に潜る海女のように身を隠している私の住処を、そこだとさえ絶対に言うなと、目くばせをするという意味をこめて、あなたにワカメを食わせたでしょう」というもの。もともと和歌がさっぱりの則光は「歌はダメだ。こんなものは受け取れない」と

逃げ帰つた。その後、遠江の介（次官）となつて都を離れたので則光とは間遠になつたと「枕草子」にある。どこか憎めない愛嬌のある人物であると筆者には感じられるが、どうであらうか。

「和歌はダメだ」といつて逃げつた則光だが、実は院政期に編纂された勅撰和歌集「金葉和歌集」に彼の歌が一首入っている。これがなかなかの作品なのである。

みちのくへまかりけるに、あふさかの関より、みやこへつかはしたりける

われひとり いそぐと思ひし 東路に垣根の梅は さきだちにけり

寛仁三年（一〇一九）、五四歳の則光が陸奥守になつて任地に向かうときに作つた歌であろう。短歌にはまったく素人の筆者であるが、この歌はなんと素朴で初々しくてよい。こうるさい宮廷社会からやつと脱出して、いま陸奥守となつて遙か彼方のみちのくへ下る。あの広く、粗野で荒々しい国こそ我が生きる国だとそう思うものがあつて則光はさつそうと馬をいそがして逢坂の関まで来たにちがいない。則光の人となりが見えらるる歌である。和歌を忌み嫌つた則光であるが、京都を離別するこの時だけに畢生の一首をものしたわけである。冗談のようであるが、南北朝時代に編纂された「尊卑分脈」（平安・鎌倉時代の氏姓調査の基本資料）は則光を歌人としている。ただし、筆者の調べた限りでは、この歌以外に彼の歌を見つけることができなかった。

則光が陸奥国でどのような働きをしたかについては何の資料もない。ただし、任期を終わる際に朝廷に収めるべき砂金収集のことで問題を起こして後任の平孝義（「小右記」や「栄花物語」によると定子の兄たちが起こした花山法皇奉射事件において定子の兄たちの所在を密告した恩賞として位階を一つ上に進められた。ただし、密告などは賤しい物売りのすることだと孝義は父親の平親信からひどく叱られたという。）から苦情を申し立てられている。それが辞任しきつと後までも尾を引いたらしいことが「小右記」長元元年（一〇二八）九月六日の条および「左経記」同日の条に見える。則光が陸奥守の任を終えたのが治安三年（一〇二三）ごろで、清少納言が亡くなったのは万寿二年（一〇二五）ごろというのが定説だから、最晩年に元夫が起こした事件を耳にしたかもしれない。元夫の不始末を聞いてどんな顔を見せたか。「やつぱりあの人らしい」と苦笑したか。見てみたい気がする。

蛇足ながら、橘則光以外にも幾人かの橘氏の間が陸奥守や出羽守となり、橘則光以降の一族と陸奥、出羽国との関係が深い。たとえば、則光の従兄弟である橘惟通^{たちばなこれみち}の子である好則は従五位の位階をもちながら陸奥の住人となり、中央の軍事貴族の一人となった。好則の子孫はずっとながらえ石田三成の子を保護した津軽為信にまで至ったという説もあるが、真偽の程ははっきりしない。前陸奥守橘則光への苦情を申し立てた平孝義は

陸奥の豪族安倍氏（前九年の役の安倍頼時、貞任の一族）の外戚となっている。孝義の子で安倍頼時の義理の兄弟にあたる平孝忠は安倍貞任ら安倍一族の人々と運命をともにした。藤原氏、平氏、小野氏、橘氏といった人々は次々に東北に進出し、中央軍事貴族として彼らは東北のあちこちに勢力を広げていったのである。宮中に出仕していたころ、清少納言と親しい関係にあった人々は男性では既に名前の出た藤原齊信、藤原行成、藤原公任、藤原実方、源経房などであり、女性では赤染衛門、和泉式部などである。もちろん中宮定子に仕えていた多くの女房たちとも親しく付き合っていたらしいことは「枕草子」から十分にうかがえる。

藤原齊信は長徳二年（九九六）、中宮定子の兄弟である伊周・隆家の左遷と入れ替わりに参議となった。この人事にはちよつとした裏話があるのだが、イケメンのモテモテ男で教養もあり宮中の人気者であったがかなりしたたかな政治家でもあったとだけ述べて、今は先を急ぐこととする。

藤原行成は一条天皇の無二の側近であり中宮定子の子である敦康親王の家司別当（世話をする事務官の長官）であった。しかし天皇の譲位にあたつて後継として敦康親王ではなく道長の娘である彰子の生んだ敦成親王を勧めた。理由は定子の母が高階家出身であること。高階家の先祖には在原業平と伊勢斎宮の恬子^{やすこ}内親王とが密通して産まれた子どもである高階師尚^{もろひさ}がいるからである。そのため高階

家の子孫は伊勢神宮にはばかりがあり、王位には適さないという論である。二枚舌の持ち主ともいうべきだろうが、一条天皇を支えた名高い政治家の一人であったという一面を忘れてはいけないということであろう。その一方で行成は能書家として有名であり三蹟の一人とされ、現存する彼の書跡は国宝に指定されている。

藤原公任は漢詩・和歌・管弦に秀で、齊信・行成・源俊賢と共に一条朝の四納言と称讃されたが、遂に大臣に上ることはなかった。「和漢朗詠集」「北山抄」「新撰髓脳」と著作は多数ある。「大鏡」によると父親の兼家から「公任と比べ才が劣る」といわれた若き日の道長はそのとき「面をや踏まむ」といったが、公任がついに大臣に至らなかったのはそのせいかもしれない。

源経房は醍醐天皇の孫であり、藤原氏によつて左遷された源高明の子である。道長の妻である源明子・源俊賢とは兄弟にあたる。

藤原実方は「かくただにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを」の歌で有名な歌人。正四位下に至り陸奥守となったが任地である陸奥国で長徳四年（九九八）十二月に死亡した。その不運さのためかさざまな伝説が生まれている。有名なものは行成と些細なことで口論となり行成の冠を投げ捨てたという事件。このため一条天皇の怒りを買って蔵人頭になるはずが陸奥守に左遷されたというもの。この事件は実方の陸奥下向に際して天皇から多大な餞別を受け

たことが、当の口論相手の行成の日記「権記」に書かれているので、まず史実ではあるまい。

さて、わりと早く亡くなった実方を除けば他の人はみな道長派にくみする人たちである。事実、長保元年（九九九）中宮定子が出産のために平生昌の邸宅に出御した際、齊信・行成・公任・経房の四人は一人も同行していない。道長の目を憚ったためである。この道長に近しい交友関係から定子の周りの女房たち、当然かれらはアンチ道長派であったが、その彼女たちから一時的に清少納言は道長派の人もしくはスパイであると見られていたらしい。一四三段「殿などおはしまさで後」で清少納言が周囲の人にどう扱われたかが書かれている。

（中宮定子に）お仕えしている女房たちが、私と親しい間柄の人に左大臣（道長）がたの人がいる、と言つて、みなが集まつておしゃべりしている時でも、私が局^{ぼね}から御前にあがる姿を見ると急にお互いの話を止め仲間はずれにする態度が、今までにないこととで、にくらしい……。私のことを左大臣がたについてしまったように悪評をたてて、果ては根も葉もないことを取りざたされるようだ。

今でいう「いじめ」だろうか。気の強い清少納言もさすがに参つたらしい。

一条天皇の時代に活躍した四納言の中で最も長く生きたのは公任である。長久二年（一〇四一）一月、七六歳で亡くな

った。彼は清少納言の晩年までも交流があったようで「公任集」に「せい少納言がつきのわにかへりすむ比」という詞書が残っている。この詞書は清少納言が人生の終わり（一〇二五年前）に京都東山の月輪に移り住んでいたことを今に示す資料となっている。

さて、次に清少納言と親しくつきあった同時代の才女といえは和泉式部と赤染衛門であろう。

和泉式部は歌人として有名であり、勅撰集にも二四八首入集しており同時代の才女の中では随一の女流歌人である。最初、橘道貞と結婚し小式部内侍を産んでいる。道貞と別れた後、為尊・敦道の二人の親王から愛され、その経緯が「和泉式部日記」に記されている。その後、彰子のもとに出仕。藤原保昌と結婚した。

歌集である「和泉式部集」には赤染衛門・清少納言と詠み交わした歌が何首が残っている。おもしろいのは「紫式部日記」には「（和泉式部とは文を）おもしろう書き交はし」た、とあるが和泉式部集には二人のやりとりは書き残されていないことである。このことは後でも述べるが赤染衛門でも同じである。どういった事情でいうなったのか、筆者にはよく分らない。

赤染衛門は道長の正室である倫子、その娘である中宮彰子の二人に仕えた女房であった。倫子の兄源時叙との恋を経験しつつ、大江匡衡と結婚した。良妻賢母の誉れ高く、宮中では夫の名前を使って「匡衡衛門」というあだ名で呼ばれていた。

た。勅撰集には一〇一首入集しており、歴史物語「栄花物語」の作者ともされている。清少納言を文字通り「クソミソ」にけなした紫式部も赤染衛門のついでに次のように書いている。

（歌人としては）まこといかにも本格派で、歌人だからといって事あるごとに詠み散らしたりはしませんけど、私の耳に入っている限りは、ちよつとした機会に詠んだ歌もそれこそ頭の下がる詠みぶりです。

清少納言とはまったく違った紫式部のほめぶりがおもしろいが、歌才・人品ともに一目置いていた赤染衛門の集には式部との間で取り交わされた和歌の記録はない。和泉式部・赤染衛門の二人とも紫式部との交流のあとを示す和歌などは残していない。兩人とも紫式部との文通^{なま}わしをさして印象にとどめなかったか、書きとめるだけの価値を認めなかったか、そもそも式部との間に文通^{なま}わしなどなかったのか、よくわからない。その一方で和泉式部と赤染衛門の間では文通^{なま}わしがさかんにされている。特に「信田の森」の贈答歌は有名で、和泉式部と最初の夫である橘道貞との夫婦仲に対する赤染からの忠告という、その歌の内容からは二人がかなり親しく口をきき合える間柄であることがうかがえる。そして、興味深いことに二人とも、それぞれの家集の中に清少納言との文通^{なま}わしを記録している。今をときめく御堂関白家（道長の家）ゆかりの才媛として公私問わず交際相手

にことかくことはなかった和泉式部と赤染衛門の二人が政治上の利害において対立し、しかもすでに零落した中関白家（道隆・定子・伊周らの家）に属する清少納言に敢えて消息を送る必要性はなかったはずである。とすれば、赤染衛門集や和泉式部集に残された清少納言に詠み送った歌の数々は彼女たちの発意によってなされたものといつてよいだろう。

ここからは筆者の勝手な推量なのだが、和泉式部も赤染衛門も、そつと日記に人の酷評を書き付ける一言居士である紫式部よりも「したり顔にいみじう侍りける人（得意顔でとんでもない人）」であったとされた清少納言の方を、風雅の友と認めていたといつてもよいのではないか。赤染衛門と清少納言の歌を紹介してみ

跡もなく雪ふる里は荒れにけり

いづれ昔の垣根なるらん

赤染衛門

元輔が昔住み侍りける家のかたはらに、
清少納言住みけるころ、雪のいみじく降りて隔ての垣も倒れて侍りければ、申しつかはしける

新古今和歌集

巻十六 雑歌上 1580

衛門のをととのまゐると聞きて

風の間に散る淡雪のはかなくて

ところどころに降るぞわびしき

清少納言

清少納言集 35

赤染衛門の歌は「人の通う跡も見えぬほど激しく降る雪に父上の住んでおられた家のあたりは荒れ果ててしまいました。どこが昔の垣根でしょうか。」という内容である。詞書にある「元輔が昔住み侍りける家」という言葉によって東山月輪の父親の旧宅に晩年の清少納言が住んだと長らくされてきたが、最近になって三田村雅子氏が詳しく考証され、この家は藤原棟世のものと判明した。晩年、清少納言は夫の邸宅にいたのである。また、清少納言の歌は「風が吹く間に散る淡雪がはかなくあちらこちらに降っているのはわびしいことです」という内容で「をと」とは女性に対する敬称である。「衛門」とはたぶん赤染衛門のことであろう。二人の歌で見る限りは孤独でわびしい住まいが見えてくるようだが、次の点で注意する必要がある。「枕草子」一七八段「女のひとりすむ所は」で清少納言は

女が一人で住む所は、ひどく荒れ果てて、築土塀なども所々こわれていて、池などがある家でも、水草が生え、庭などでもヨモギでぼうぼうといった風でもないが、所々、砂の中から青い草が見え、なんとなく頼りなさそうなのが、風情があつてよい。……万事にきちんとしているとしているのははなはだおもしろくない

といっている。この少し荒れた風情の住居は当時の物語よく書かれた女の独り住みの様子そのものであり、女性たちの理想の住居の姿である。だから、「荒れ果て

「た家」というのも少し割り引いてイメージすべきではないだろうか。また、先に述べた角田文衛氏の指摘、つまり清少納言は決して零落した生活などはしていないかったという意見もある。こうした点から清少納言が朽ち果てた住居に住んで孤独で寂しい、そして零落しきつた老人の日々を送ったというのは少し違うのではないかと筆者は考えている。たまに旧友の訪問や便りがあったりして、わびずまいとはいえ心豊かな晩年の生活を送ったのではないだろうか。

最後に一〇三七年頃に成立したといわれる『栄花物語』の正編（前半部分のこと。後半は続編といわれる）は赤染衛門の作とするのが定説であり、道長よりに書かれた作品とされている。その『栄花物語』の中で赤染衛門は、皇后定子の最後の日まで傍らに侍して「をかしう誇りかなるけはい」でその後宮を華やかなものにしたと、清少納言を讃えている。この記述からも赤染衛門が豊かな心を持ちつつ細かい気配りのできた女性であり、清少納言ともしつかりとした友情を育んだのではないかと、この記述のほかには何の確証もないのだが筆者はつい夢想してしまう。

【補足】

◇赤染衛門と和泉式部の贈答歌の注と口語訳
赤染衛門と和泉式部の贈答歌は「新古今和歌集」巻第十八雑歌下にある

和泉式部 道貞に忘れられて後ほどな

く敦道親王通ふと聞きてつかはしける

うつろはでしはし信田の森を見よ
返りもぞする葛の浦風

赤染衛門 1820

注
道貞（橋道貞 和泉式部の最初の夫、信田の森（和泉国の歌枕。二人の家庭の比喩）、葛の浦風（葛は和泉式部、風は道貞に見立てる）

「口語訳」葛の葉は色を変えずにしはらく我慢をして信田の森の様子を見ていなさい。裏葉を吹き翻す風が戻ってくると困るから。その時すでに色が変わっていたらどうするの。

返し

秋風はすぐ吹けども葛の葉の恨み顔には見えじとぞ思ふ

和泉式部 1821

注

秋風（風は道貞のこと 秋は「飽き」を響かせる）、葛の葉（自身の比喩）
恨み顔（「恨み」に「葛」の縁語「裏見」を懸ける）

「口語訳」はい、秋風は身に冷たいほど吹きますが、葛の葉は裏葉を見せて恨んでいる様子には見られな

友人を気遣う赤染衛門と「わたし大丈夫よ」と返事をする和泉式部。赤染衛門の人柄と赤染・和泉の二人の交友ぶりがかがわれる。

◇「清少納言集」のこと

「清少納言集」は清少納言の歌集である。収録された和歌は四〇首余りで、同時代の女流歌人たちの歌集に比べるとかなり少ない。また勅撰集への入集歌数も一五首と紫式部の六二首に比べても少ない。確かに、清少納言は歌が苦手であつたようだが、たぶん、それよりも優れた歌人であつた清原元輔の娘ということをかかなり重荷に感じていたのではないか。「枕草子」九五段には「ぜひ」と中宮定子に乞われて窮した彼女が提出した歌がある。

その人の のちと言はれぬ 身なりせば
今宵の歌を まつぞ詠ままし

（誰その子と言われない身でしたら、今宵の歌は誰よりも早く詠むのですが）
亡き父の名誉のためには下手な歌などは絶対に披露できない、そんな気持ちでここには見える。

さて、清少納言の和歌に話をもとせば「枕草子」一二九段「頭の弁の、職に参りたまひて」に書かれた歌が作られた事情から見ると、百人一首にも採られた「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関は許さじ」という有名な歌には当意即妙に和歌を生み出す清少納言の才能が確かに遺憾なく發揮されている。

しかし、「清少納言集」の歌を詠んでいくと、自らの心象世界を素直に詠み出しているものが少なくない。

- ①忘らるる身の理^{ことわり}と知りながら
思ひあへぬは涙なりけり
- ②我ながら我が心も 知らずして
また逢ひ見じと 誓ひけるかな
- ③心にはそむかんとしも 思はねど

先立つものは 涙なりけり

④憂き身をばやるべき方もなき物を
いづくと知りて 出づる涙か

これらの歌は理屈は分つていても、感情をうまくコントロールできない苦悩を率直な言葉で詠んでいる。頻出する「涙」を見ると「枕草子」の世界とは異なる清少納言像が浮かび上がる。また、「清少納言集」には次のような歌も見える。

⑤月見れば 老いぬる身こそ哀しけれ
つひには山の 端に隠れつつ

次第に老いていく自分にじつと向き合い、悲しみながらもそれを受け入れようとしている心情が平易な言葉で詠まれている。ここにあげた①から⑤までの歌を見ると、清少納言の代表作とされる機知に富んだ歌は彼女が中宮定子のサロンにいたことよって詠まれることが可能であつたと筆者には感じられる。

「清少納言集」に見られる理性と感情が乖離したような歌は、言っても仕方ないことを、それでも言わずに言われなかったつづやき、それも人に見られることを意識しないで書きとめたつづやきではなかったか、というのが専門家の意見である。経済的にはまずまずとはいえ老女の晩年である。息子の橋則長 娘の子馬命婦はともに宮仕えで忙しい。変化に乏しい日々の生活を送る一人暮らしの老人の清少納言に赤染衛門らとの文交わりは何よりの心の支えだったに違いない。

以上、「清少納言集」に見られる清少納言像は「枕草子」で見せる気が強くて才気煥発、丁々発止と公卿たちと渡り合った姿とは異なるということを述べてきた。一人の人間をある一面だけから正

我がおくのほそ道の旅(7)

成瀬 和之

しく捉えることなどはまず無理であり、複雑かつ多面的であり、鶴のようにつかみ所がないからこそ人間はおもしろい。こういった考え方を寛容というのなら、「清少納言集」にある和歌は清少納言のとらえ方をより寛容な態度でするよう筆者に迫ってくる。

◇伊賀専と専女のこと(前回の補足)

「専女」は「土佐日記」に見られる語である。正月九日に土佐国の大湊から航行し、やつの思いで土佐国の奈半につく。その場での記事に「翁一人、専女ひとり、……心地悪しみて、物もものしたまはで、ひそまりぬ」とある。「翁とは紀貫之のこと。この時、彼は六十三歳であった。「専女」とは彼の妻である。記事は貫之も彼の妻も気分が悪くなつて食事もしないで寝込んだという内容。二人ともひどい酔酔をしたのであろう。「専女」は十世紀中頃の辞書「和名類聚抄」に「今、老女を呼びて、太字女『たうめ』読み方は『とうめ』となす」とある。すなわち専女とは老女のことである。余計なことであるが、貫之は土佐の国で「女子」つまり成人間近の娘をなくしている。そこから考えると妻の年齢は三十代なかば過ぎぐらいか。「老女」とは言われているが、少し年齢差がある。しかし、二十七歳の紫式部は四十七歳の藤原宣孝と結婚し、一年後に長女賢子を生み、その翌年、宣孝と死別している。年齢差の大きな夫婦は当時めずらしくはなかった。

「狐」を「たうめ」というのは伊勢・伊賀あたりの方言らしく、伊勢斎宮では狐を「たうめ」と称していたという。それが都まで伝わってきたと今は考えるほかはない。

親不知の断崖を超え、遊女と出会う市振

に行く前に、触れておきたいことがある。

「荒海や佐渡に横たふ天の河」の着想を得たのは、佐渡を見渡す新潟県の出雲崎である。だが、芭蕉は出雲崎に一時泊しかしてない。だから、出雲崎の人には、芭蕉はなじみが薄く、出雲崎で生まれ育った良寛の方が親しまれているのは自然である。

良寛と言えば、大抵の人がすぐ童心ということを考えて、子どもたちと一緒に、ひねもす遊ぶ姿を思い出すだろう。

ところが、修業期の良寛の心構えが、いかに厳しく、かつ細やかだったかということを示す手掛かりがある。『良寛禅師戒語』である。

九十か条の『戒語』から抜粋する。

- 一、ことばの多き
- 一、口のはやき
- 一、さしで口
- 一、手がら話
- 一、人のもの言いきらぬ中に物言う
- 一、ことばのたがう
- 一、能く心得ぬことを人に教うる
- 一、はなしの長き
- 一、こうしやくの長き
- 一、自慢話
- 一、物言いのほてしなき
- 一、へらず口

一、子供をたらす

※ただ、遊んでいるだけの人物ではないことがわかるであろう。

一、たやすく約束する

一、そのことを果たさぬ中にこの事を言う

一、人のはなしのじやまをする

一、悪しきと知りながら言い通す

※今の関係に聞かせてやりたいですね。

一、物知り顔に言う

一、推し量りのことを真事になして言う

一、さしたることもなきことをこまごまと言う

一、見ることを聞くことを一つ一つ言う

一、よく物のこうしやくをしたがる

一、人のことを聞き取らずしておのがことを言いとおす

一、学者くさき話

一、くれて後、人にその事を語る

一、おれがこうしたこうした

一、あう致しました、こう致しました、ましたましたのあまり重なる

一、はなであしらう

私も一つひとつ思い当たることばかりで耳が痛い。

良寛が、ただ遊んでいるだけの人物ではないことがわかるだろう。

出雲崎には良寛記念館がある。そこで

出会った入館者は、アジア系と北欧系らしき外国人二人だけであった。

以上、「我がおくのほそ道の旅」番外編でした。

米国紀行(7)

河原林 成行

摩天楼

最後の訪問地・ニューヨークについて書いてみます。

ここは前回の政治の中心で落着いた雰囲気の特別区ワシントンDCとは対照的に、経済・文化の中心ではありませんが、何と言つても市であることによる自由さというか気楽さというものがあるように感じられます。

東京に対する大阪とまでは言いませんが千代田区に対する新宿区のようなものでしょうか。

五月四日(日)、晴。

レフコビッツ夫妻に見送ってもらつてボルチモア・ワシントン国際空港を発つた「ビーチクラフト機」は、雲より低い低空飛行で、ニューヨークのラガーディア空港へ向かいます。この国の飛行機で感心するのは、こんな小さな、一時間という短時間のフライトでも一応機内サービスがあることです。スチュワードというよりも添乗員と言った方が当たっている比較的若い女性が、缶ジュースのような飲み物をサービスしてくれます。しかし、フライト時間が短く、乗客も少ないので、すぐに回収に來ます。ゆっくりしているとは飲み損ねそうです。

道路を走っている車まで見えるとは言いませんが、かなりの低空飛行です。間もなく、ニューヨークの、いや、この国

のシンボルである「自由の女神 (Statue of Liberty)」が、ハドソン川の河口付近に小さな緑色をした点として見えてきました。

映画「猿の惑星」(The Planet of Apes)のラストシーンは、強烈に印象的でした。あの像がこの国の象徴としてだけではなく、この星(地球)の象徴として表わされたのですからネ。

少しだけ大きく見えるようになった「自由の女神」を左手に見て、お世辞にも美しいとは言えないハドソン川の河口を横切ると、全米オーブンテニスのセンタースコートのもとで真上を飛び(試合がないのです。試合があれば、真上は飛べないことになっています)、マンハッタンの島に立ち並ぶ摩天楼群が、まるで「ミノ倒し」のドミノか、喻えが悪いですが、アーリントン国立墓地で見たような墓石群のように目に飛び込んできます。イースト・リバーに架かるブルックリン橋も見えてきました。

「これがニューヨークか」という思いとともに、ビーチクラフト機は、低空飛行の少々荒っぽいスリルのあるフライトを終え、何とかラガーディア空港に滑り込みました。十一時五十五分着です。この空港は、ニューヨークへの玄関として一番ポピュラーな主に国内線の空港であることも知りました。

ラガーディアからニューヨーク市街へは、バスが安くて便利だそうです。バス乗場で、ここで二泊する予定のホテル The Hilton & Towers までの切符を買いいます。

一人、一〇ドルです。

米国初日の、ボルチモア・ワシントン国際空港からザ・コンフォート・インまでの一件もチラツと頭をかすめますので、「ここへ来るバスが本当にThe Hilton & Towers へ行くのかどうか」、しつこいほどに案内人兼切符売りに確認します。

一〇分ほど待つて、ようやく「ニューヨーク市行き」のバスが来ました。ということは、ここはニューヨーク市ではないのか?では、何市? フト、いやな予感がします。

バスは、走り出して間もなく渋滞に巻き込まれます。ワシントンDCとはケタ違いの、どちらかというと日本的なゴチャゴチャした渋滞です。というのも、ニューヨーク市街のあるマンハッタン島は、ご存知の通り、島の東西をハドソン川とイースト・リバー(何故か、ハドソン・リバーとかイースト川とは言わない)に挟まれており、我々のように東側から進入しようとする、イースト・リバーを渡らなければならないのですが、橋の数が絶対的に少なく、慢性的な渋滞を引き起こすのです。

倉庫街のような所をすり抜け、チョットした市街地を通り抜けて、やっとクイーンズ橋までたどり着きます。ここまで来ると、ニューヨークのシンボルのようなエンパイア・ステートビル等の超高層の摩天楼群がニョキニョキと立っているのが手に取るように見えてきますので、方向は合っていることが分かり、とりあえずは一安心です。

橋を渡るとその超高層の摩天楼群の中

心へ突入です。今まではチョット遠くから、横からの視点で遠望していて全体像が見えていたのですが、今度は下からの視点で、見上げなければなりません。

一〇〇階建の超高層ビルが、当たり前のように、これでもかとばかりに続きまです。イヤ、都市の進化論によると、地価のペラボウに高いこの地区では、上へ伸びるしか仕方がないのです。逆に、政治の中心が近くにあり、経済、文化や芸術の中心であるこの地にはそうまでしてでも進出し定着するだけの価値がある所なのです。

幸いにも、地質構造的に地下の岩盤が一枚岩でシッカリしていることが調べられ、保証されているらしいので、地震等の心配はなく、あとは建築技術がどこまでいけるかだけで、その技術の許す限り、どこまでも天に向かって伸びて行けるのです。

表面上の摩天楼だけを真似て、いつ地震に襲われるか分からない、というより必ず襲われることが地質構造的に保証されているのに高さを競うどこぞの国とはチョット違います。

超高層ビル群の中は真つ昼間だというのに太陽も中々拝めず、まさに日陰の子です。

バスはマンハッタン島へ入ってからは少し走るようになりました。予定では、約三〇分を着くはずなので「もうソロソロかな?」と思う頃に、一人抜け、また一人抜けて、乗客は我々を含めて四人ほどになっています。何とも心細いのでついに、「このバスはThe Hilton & Towers へ行くのか」と聞いて

みます。黒人運転手が、「行くよ」でしまいです。ニューヨークは「治安が悪く、少々怖い街」と聞いていたので、地図にも載っていないような、探すのに一苦労したり、そこらで聞いても誰も教えてくれないようなホテルではなく、少々高くついてもいいから誰でも知っていて教えてもらえ、名の通ったホテルとしてThe Hilton & Towers を選んだのです。「治安が悪く、少々怖い街」であるのは今では通常時なら、一部の地区のしかも深夜だけだということをこちらへ来てからあとで知りました。

もう一時間はとづくに過ぎていきます。我々の不安もピークになってきています。その時、追い討ちをかけるように、今度は、「バスを乗り換えてくれ」と言って、降ろされてしまいます。死者に鞭打つに等しい行為です。外は、真つ昼間というのに太陽も当たらず、ビルの谷間を渡る風も、もはや死者同然の二人の日本人にとっては、少々肌寒いものがあります。

今どこにいるのかがサッパリ分からないというのは不安なものです。待つことしばし、中国系の運転手のマイクロバスがきたので、またも「The Hilton & Towers へ行くことを確認して乗り込みます。マイクロバスは一方通行(one way)や狭い街路をクネクネと走ります。わざわざ大きなバスから小回りの効くマイクロバスに変わったのはこのためだったようです。

妻もひどく心配になってきたらしく、「本当に大丈夫?」と言っている時に、「終点のHiltonです」というアナウンス。ここは終点だったのです。予定時間をは

るかにオーバーして十三時三〇分の到着です。まさに辛抱の限度ギリギリ、精神衛生上極めて悪い到着でした。

何やかや言っても、着いてしまえばコソチのもの。ここは、東西に走る西行五十三番通りと五十四番通りに挟まれ、南北に走る六番街に面しています。この一本東の通りが有名な五番街ですから正真正銘の一等地です。「The Hilton & Towers」の立派な看板も上がっており、ここニューヨークの他のホテルと比べても決して遜色のない立派な風格さえ感じられるホテルです。玄関には、大きなリムジンも停まっています。

中へ入ろうとすると、六番街にすごい人だかりが見えます。何だろうと思つて見てみると、騎馬隊やオープンカーなども加わった、リオのカーニバルのような「カリブのパレード」です。ボリウムを一杯にあげたカリブ調のカラッと乾燥した音楽に合わせて、美女達が腰をくねらせ、体を一杯に躍らせて行進しています。しばらく見ていたのですが、こんななんぼ見てもキリがないし、男の私には飽きませんが、妻が手を引つ張るので止む無くホテルへ入ります。

回転ドアを押して中へ入り、チェックインします。ニューヨークには進出している日本企業も多いので、フロントに日本語のできる人も配置されています。二三四八号室の「カードキー」を二枚渡され、二十三階の四十八号室へエレベーターで一気にあがります。ようやく落着くことができました。窓からは、隣のビルの

オフィスが見えます。日曜日なので人の気配は見えませんが。

チヨット落着いたところで、昼食をとりに行くことにしました。ニューヨークは日本からも直行便があるくらいで、日本食の店もありますので、久し振りに日本食を食べることにしました。といっても、五〇番通りを少し西へ入った「いろは」で「天ぷらそば」です。二七・二五ドル(約三三〇〇円)で久し振りという「馳走に満足しました。ちなみに、税・チップ込みです。

明日は、日本人向けの「ニューヨーク一日観光バス」に乗る予定です。一階の「横浜・岡田屋」の横からの出発です。日本人による日本人のための店「岡田屋」へちょっと寄り、土産を買い込みました。少し時間があるので、近くを散歩してみました。セントラルパークへもすぐです。五番街へもすぐで、グルッと回ってみました。気が付くともう午後七時を回っており、少し暮れかけてきますので、明日もう一度来ることにしました。この街もこの辺は夜が早いようです。

その夜 八時過ぎに、米国へ来て初めて日本へ電話をしました。日本食の店もあり、日本人の店「岡田屋」もあり、日本への直行便もある。ここニューヨークでは、日本が近く感じられました。「いつでも帰れる」と不眠、帰国する日もあさつと近づき、こちらにも気持ちの上で余裕ができたのでしょうか。

「モシモシ、いまニューヨーク。みんな元気?」。日本時間の五日、午前七時過ぎ、子供らはまだ寝ているハズです。

I Love NY!

「花」の美しさという様なものはない

大江 雉鬼

いくらか食い足りないところがあったので、前回に続いて小林秀雄の「美しい『花』がある、『花』の美しさという様なものはない」をもう少しもてあそばさうと思う。ジョルジュ・バタイユの反観念論を紹介するにあたって、小林のこの言葉を引き合いに出すあたり、濫渾の慧眼には感服するばかりなのだが、それでも抽象的な哲学用語に敷衍の高さを感じてしまふところがないわけではない。しかし、小林が言わんとしたのは、まさしくその抽象的であるがゆえの分かりづらさを排除することなのである。「当麻」の中で、件の言葉が出てきた後を続ければ、こうなっている。

彼(＝世阿弥)の「花」の観念の曖昧さに就いて頭を悩ます現代の美学者の方が、化かされているに過ぎない。

前回も触れたが、小林が言うところの「花」は、あくまでも世阿弥の「花」であり、能楽に表現されたものである。植物一般の花に置き換えて通じないでもないが、正確を期するのなら能楽の枠組みは堅持するべきだろう。そして世阿弥の「花」といえば『風姿花伝』の有名なフリーズ「秘すれば花」を思い浮かべるのが普通なのだが、「秘すれば花」というその部分だけが一人歩きをするものだから、いたずらに抽象的な解説が付される傾向にある。そうした状況を念頭において、

小林は「現代の美学者の方が、化かされている」として、眼前で演じられている所作がもたらす感興こそが「花」に他ならないと言う。「美しい『花』がある、『花』の美しさという様なものはない」を構文的、文法的に解析すれば、小林の意図はよりはっきりしてくる。

まず「くがある、くはない」という対比の構文だが、これは類似の言い回しを並べることで違いを際立たせる修辭法である。並べられた二者が似ていれば似ているほど、両者の違いが鮮明になり、片方が「ある」で他方が「ない」の両極端な括られ方がインパクトを持つ仕掛けである。そして肝心の類似部分だが前半が「美しい花」で後半が「花の美しさ」。これが似て非なるものであることは重ねて強調しておきたいところである。大雑把に言ってしまうと「美しい花」も「花の美しさ」も同じだろうと思ってしまうが、ちだが、この違いこそがこのフリーズの眼目である。前者の「美しい花」では「花」が中心で、修飾語の「美しい」が補助的に掛かる。それに対して「花の美しさ」は「美しさ」という抽象概念が中心であり、それを連体修飾句「花の」が限定提示している。要するに認識できる形で存在しているものは「花」だけであって、その「花」は美しいと評価できるものであったとしても、第三者の定義を借りて「美しさ」に分類できる抽象的な属性が備わっているわけではない、ということなのである。あくまでも目の前で演じられる具体的な所作が大切なのであって、

それ以上でもなければ、それ以下でもない。どれだけ高邁な解説が用意されていたとしても他から与えられた「美しさ」が最初から存在しているのではないというのである。

私自身、能楽を鑑賞する機会とはほとんどないのだが、能楽でなくてもクラシック音楽などの演奏会でもいいし、絵画の展覧会でもいいだろう。もつと言えど世間一般に芸術の枠内で扱われるものでなくとも構わない。その作品と向き合った時、そこから伝わってくる得体の知れない何かを感じたとすれば、まずはその感覚に重きを置いてじっくり味わうべきであって、解説書その他で紹介されている蘊蓄のさまたちは関係のない話である、と翻訳しておけば、いくらかは分かってもらえるだろうか。テレビなどで大々的にPRが打たれている展覧会に出かけると、黒山の人だかりになっているのは仕方ないにしても、会場内では解説ばかりを読んでいる人もいたりするわけだが、そういう人にしてみれば、目の前に美しい絵があるのではなく、絵の美しさがあるものだから、それを一粒も漏らさないよう持ち帰ろうと頑張っているのに違いない。少しばかり脱線した感があるが、眼前の所作が大切であり、与えられた美しさが前もって用意されているのではない、というところまで戻る。と、このようにかみ砕けば、これが反観念論というものと重なり合ってくることも分かるはずである。観念論では、善や美といった頭の中で（＝観念的に）しか捉えられないものをめぐってあれこれと思索を重ねる

のだが、往々にして抽象の森に迷い込んでしまう。「観念論的な議論」といった言い回しが否定的に用いられるのは、実体的な立脚点を失った応酬がなされているケースに対してである。正義を巡る議論にありがちなのだが、当事者同士は互いの正義を主張し合って議論を戦わせているつもりでも、双方には比較の基準がないのでかみ合うことがないのはもちろん近いところでのすれ違いさえ起こらない。議論は建設的とはほど遠い悪口合戦となり、挙げ句は自らが唱える正義を実現すべく、相手を敵と呼んで力による排除を試みる。いわゆるテロリズムへと展開していく。

「花の美しさ」を希求する、その心が純粹であればあるほどに観念論の落とし穴はその口を大きく開くことになる。これを宗教的な文脈でいうのならば、原理主義と呼ばれる一群は観念論が悪し様に拡がったなれの果てといつていいだろうし、科学の分野に目を移すとすれば、理論の純粹性を追求するあまり、研究が本来目指していたところを見失ってしまうケース（SFやアニメではお約束のマッドサイエンティストなど）がそれに該当するだろう。小林秀雄の「美しい『花』」がある、『花』の美しさという様なものはない」は、あくまでも能楽に言及したものではあるのだが、その守備範囲を広げるなら反観念論であり、反テロリズムの思想にも読み替えることができる。そうした意味からも、繰り返し咀嚼しておきたいフレーズである。

孫ウオツチング（19）

福田 圭

七月二日、二人目の孫が生まれた。光君は、弟ができて、兄になったのだ。そんなわけで、七月三日から五日まで、光君と共に過ごすことになった。

光君はよく食べ、よく歩き、保育園の、一歳児クラスでいちばん大きいという。手足ががっちりとし、二の腕も、ふくらはぎも、しっかりと肉がついていて、「ムチムチ」である。

夕食の時間になると、袋に入った「自分の食器」をテーブルに運べる。「トイレは大丈夫か」というと、「イヤイヤ」と首を横に振る。水がほしいかと問うと、「イヤイヤ」、ヨーグルトが食べたいかと問うと、欲しそうにする。言葉は「アーアー」とかしこ発しないが、こちらの言うことはわかるのだ。

引き戸を開け閉めしては、「いないいないばあ」を楽しんでいる。

スプーンでご飯が食べられ、食べさせようとすると、機嫌が悪い。「自分で食べる」という気持ちが強い。包装紙に包んだチーズの包みを、むいて食べると、包み紙は、お父さんに「ハイ」という感じで、手渡す。コミュニケーションがしっかりと取れている。

生まれたばかりの赤ちゃんを抱くと、三五〇グラムの大きな赤ちゃんだが、その軽いこと。光君の重さと比べるとそう感じた。

光君は病院にいる弟とはまだ対面していない。さあ、お兄ちゃんになって、弟とどのような人間関係を築いていくのだろうか？

編集後記

豪雨による大災害が九州地方に起きた。極地的にもすごい雨が降れば、日本はどこであつても被害が起きます。いつでも起きるかわかりません。防災の手立てが無いような豪雨です。

いつも思うのですが、天気予報官は大変だろうと想像します。天気予報が当たればいいですが、当たらないと非難されます。今回のようにめったに起きないような場合は、非常に勇気ある判断が求められます。

大雨特別警報が出されてすぐに被害がたように見えました。もしも遅れていたらもっと被害が大きくなっていたかもしれません。やはり、自分の身を守るのは自分です。やばそうだと感じたら直ぐに避難することです。

まだまだ、梅雨が続きそうですから、豪雨にはお気をつけてください。

なお、「おつちよこチヨイぼけ」は今回はお休みさせていただきます。

どう思っても…

「オイツーこらっ」こんな言葉が私の身に降りかかってきた。

晴れた朝、時計午前六時を指している。気持ちよさを身体に受けて歩いて数分間。

振り向けば、ほうきを手に鬼面のような男が近づいてくる。

「おまえとこの犬のウンコや、とつてゆけ」

へえ、なるほど湯気が立っている。たしかに、安ベエのウンコやなアー。

「えらいすんまへん」スタコラサッサと歩きかけたら

「女らしく、すんまへんと何でいへんのや、コラッ」

アホか…と口の中でとなえながら、速足で駆け抜ける。

「ああ、怖かったなア安ベエー」

この同じ時刻に朝の空、雲のひとつひとつが私をみている。空の上では夏が近づいている。安ベエー、遠くを見るような顔をし、首をひねっている。

早う、あつちの道をゆこうよ
バアさん。

前を向いて

同世代の人に体調を尋ねると、早い返事が

「今日の一日が一番若いのよ。元気があるんだよ。明日のことは分らない」と言う。

「今」が、今日が、一番元気だ。今を積み重ねていくしかない。考え方によっては、この瞬間の人生、

年令も後戻りはできない。そう思えば、何かを始めるのに年齢は関係ないと思う。

「思い立った時が、始め時」

一年の計はたてたけれど、始めただけで「よし」としよう。

浮世のよしあしは脇に置いて、みんな一年で一才は老いてゆく。

身体が、それを教えてくれる。物忘れ、年令を忘れ、自分の今も。

この失ったことを嘆くより、こたわりにとらわれず、上下の区別なくして、人生を楽しく考え、前向きで生きていきたい。

きいていきたい。



気持ちのいいこともある

初夏をむかえ、気持ちよい風が吹き抜ける。

「転宅するし、地面がないので、この球根、空き地に植えとくで、可愛がつてや」と去っていった知人。

盛り上がっていて、球根が目をもっている。よほど急いだと見える。ゴミ捨て場のような気持ちだったのか…。

雑草を除き

「お前さん、捨てられたのかいな」

つぶやきながら、球根を深く植え込んだら、気持ちの穏やかになった。

「立てば芍薬とは、よくいったもの。植えこんだ自分も忘れてしまう頃、雑草の中からスーと立ち上がった花はすばらしい。

球根をくれた人にも会うこともないが、花の素晴らしさを伝えたい。崩れ落ちるように散つてゆくから淋しいけれど、いさぎよい散り方でもある。

球根をくれた人にも会うこともないが、花の素晴らしさを伝えたい。崩れ落ちるように散つてゆくから淋しいけれど、いさぎよい散り方でもある。

球根をくれた人にも会うこともないが、花の素晴らしさを伝えたい。崩れ落ちるように散つてゆくから淋しいけれど、いさぎよい散り方でもある。



俳句

土田 裕

噴水や一期一会の広場あり

夏衣少女の足の眩しかり

両国や肩で風切る夏浴衣

風少し菖蒲の花の舞を見る

玉ねぎや一皮むけば玉の肌

影山 武司

音もなく湖面を濡らす緑雨かな

宗教改革五〇〇年ポスター
梅雨きざすルターの顔の憂い濃し

けもの道に通じていたる木下闇

伊東大室山山頂
夏蝶の伊豆七島を見晴かし

父に似る息子の寡黙や額の花

載帽式の視線ひたむき 白薔薇

山の子の足の早さや花蜜柑

水色のワンピース着て夏帽子

旧東海道宇津ノ谷峠
夏草の峠越え来て十団子

老鶯や風に押されて坂下る